JICE

40周年記念エッセイ

JICE 40th Anniversary Essay Collections

— つながる心、響き合う未来 —

一般財団法人 日本国際協力センター

知をつなぐ。世界をつなぐ。未来をつなぐ。

組織概要

和文名称	一般財団法人 日本国際協力センター
英語名称	JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER
略称	JICE（ジャイス）
代表者	理事長　山野　幸子
設立・沿革	1977年3月25日「財団法人 国際協力サービス・センター」として設立 1993年2月1日 「財団法人 日本国際協力センター」に名称変更 2013年4月1日 「一般財団法人 日本国際協力センター」に名称変更
設立の目的	我が国と諸外国との互恵関係の強化に関連する事業を通じて、国際社会の発展に寄与すること
所在地	本部（東京都新宿区） 北海道支所（北海道札幌市） 東北支所（宮城県仙台市） 中部支所（愛知県名古屋市） 関西支所（大阪府茨木市） 九州支所（福岡県北九州市）
組織の規模	基本財産　10億円
事業規模	約78億円（2015年度）
人員	317名（2017年2月現在）
登録コーディネーター	31言語、1092名（2017年1月現在）
登録日本語講師	505名（2017年1月現在）
主な事業	国際研修運営、留学生受入支援、国際交流、多文化共生、 通訳派遣、日本語研修、プロジェクト支援、開発教育支援

「初音ミク」とは

http://piapro.net

クリプトン・フューチャー・メディア株式会社が開発した、歌詞とメロディーを入力して誰でも歌を歌わせることができる「ソフトウェア」です。大勢のクリエイターが「初音ミク」で音楽を作り、インターネット上に投稿したことで一躍ムーブメントとなりました。「キャラクター」としても注目を集め、今ではバーチャル・シンガーとしてグッズ展開やライブを行うなど多方面で活躍するようになり、人気は世界に拡がっています。

※「鏡音リン」「鏡音レン」「巡音ルカ」「MEIKO」「KAITO」もクリプトン・フューチャー・メディア株式会社が展開するバーチャル・シンガーです。

Contents

ともに学び、励まし合った40年を振り返って …… 一般財団法人 日本国際協力センター（JICE）理事長　山野 幸子　2

JICEのあゆみ（1977～2017年） …… 4

外交の礎を築く国際理解

- 海外援助は“票”にならない　それでも続ける理由がある …… 三原 朝彦　6
- 日米関係から見た国際理解の促進 …… グレン・S・フクシマ　8
- 外交を支える個人の力 …… 谷口 智彦　10
- 在日本ケニア共和国特命全権大使、ケニア共和国TICAD担当特使、TICAD VI事務局長からのメッセージ …… ベンソン・オグトゥ　12
- 人的交流と日本の課題 …… 大鷹 正人　14
- 中東諸国との交流を通じて …… 浦田 秀行　16

アジアで芽吹いた留学生支援の種

- 北京で日本の国際化を想う …… 白 智立　18
- 4つの視点で考える「日本の良さ」 …… プレブスレン・ナランバヤル　20
- 私の日本に関する発見と見解と期待 ～JICEその他を通じて得た日本との触れあいの中で～ …… チャン・ズイ・ドン　22
- 世界一でも学び続ける国、日本 …… 林 慶鴻　24
- 日本留学を糧に母国でのビジネスに邁進 …… ゾー・ミン・トゥエ　26

学術・文化交流がもたらす進歩

- IIEとJICEのパートナーシップ …… ペギー・ブルメンタール　28
- 社会資源としての作家と文学 ～小泉八雲の「オープン・マインド」を生かす実践から～ …… 小泉 凡　30
- 2015年　訪日医療研修の印象 …… 周 暁俊　32
- 変わる世界、つながる人々、教育によるパブリック・ディプロマシーの新時代を考える …… アルモーメン・アブドーラ　34
- アイルランドにおける日本理解を育む「エクスペリエンス・ジャパン」 …… ヒューゴ・オドネル　36

双方を豊かにする国際交流

- 互いにかけがえのない“友”となるために …… 湊 芳郎　38
- 日本の秘密？ …… キムラ・カルロス・アルベルト・ヒロシ　40
- 南足柄で好い日本を見つけました …… 黒柳 俊之　42
- 日本中、いたるところで多彩な「お・も・て・な・し」 …… 梶原 晶子　44
- 0.000000825％の日本 …… 牧 公仁子　46
- 「日本」を伝えるということ …… 齊藤 牧　48
- コミュニケーションと日本理解を育む実践的なJICE日本語講習 …… 渡部 裕子　50
- 地域と共に創る事業 …… 長山 和夫　52
- JICE　日本を魅せる仕事 …… 内山 選良　54

編集後記 …… 56

ともに学び、励まし合った40年を振り返って

一般財団法人 日本国際協力センター（JICE）
理事長　山野幸子
Sachiko Yamano

JENESYSプログラムをはじめ日本政府の青年交流プログラムによって日本に滞在する高校生、大学生、行政官の皆様、研修コースへの参加者の皆様、JDS・ABEイニシアティブ・アフガニスタンPEACEをはじめ日本の大学院で勉強をしている留学生の皆様、日本国際協力センター（JICE）が、設立40周年を迎えるにあたりまして、JICEを代表してご挨拶を申し上げます。

JICEは、1977年3月25日に、日本国外務省とJICA（国際協力事業団、現・国際協力機構）が実施する開発途上国への国際協力（ODA＝Official Development Assistance）に、民間機能を発揮して協力することを目的に設立されました。とりわけ、JICAの研修員受け入れ事業の実施現場はJICEおよび（株）ティックスの研修監理員に委ねられました。研修監理員は、英語だけではなく、できるかぎり各国の研修員が母語で研修を受けることができるように、約25言語の研修監理員が研修に携わりました。

JICAの実施計画に基づく、JICEの研修監理員を中心とした研修実施は、JICA研修員受け入れ事業として、日本全国の各省庁および付属機関、教育機関、地方自治体、民間などの協力のもとに推進されました。同時に、すでに1970～80年代からJICEの研修監理員は、JICA専門家派遣事業に業務調整（海外でのJICAプロジェクトの異文化への対応、通訳・連絡・調整を担当）やJICAの海外調査団にも業務調整として参画し、今日の多文化対応や専門通訳の先駆けとなりました。JICAはこれまで約51万6千名の研修員を日本に受け入れ、約12万6千名の専門家を海外に派遣しています。日本のODAのJICA研修員受け入れ事業および専門家派遣事業等によって、日本の技術水準や技術移転の優秀性が認められ、アジア、中東、アフリカ、中南米、大洋州諸国等の人々に信頼と共感を得られる日本人の指導力、実践力、倫理性などが、日本が国際社会に受け入れられる重要な一端を担ったと考えております。

JICEの設立時以来今日に至るまで、経営および事業にご指導とご支援をいただきました方々、そして共に事業に携わった国内外の方々に、心からの感謝と敬意をお伝えしたく存じます。JICEは日本の海外移住事業、青年海外協力隊、技術協力等を指導し国際協力の前線で活躍された多くの方々の、貴重な経験、知見、実践によって今日の基盤を築くことができました。今後もこれまでの伝統を受け継ぎ、関係各位のご支援とご協力のもとに国際協力の実施団体として、日本および国際社会に貢献できるよう努める所存です。

2010年以降のJICEは、引き続き日本のODAの一端を担うとともに、開発途上国だけではなく、国際社会の若い世代の学生や社会人が、日本訪問や留学などでの日本滞在中、自分自身の見聞や体験を通して、お互いの国や地域を理解し信頼を深める企画と実施に力を注いでおります。とりわけ、海外の若い世代の学生や社会人に、日本の社会、歴史、文化、人々をよく理解していただき、相互理解の輪を拡げていきたいと考えています。

日本での研修参加者や留学中の行政官などに、心に残る体験や日本の文化や社会について聞くと、私たちの方が日本について知らされる深い観察や洞察に出合います。日本人は中国・モンゴル・朝鮮半島・シルクロードなどからの文化、西洋文化、仏教、儒教、キリスト教、イスラームなど数々の海外からの文化や思想を学び受け入れてきました。さまざまな文化や思想を受け入れた根底にある日本と日本人の精神性や倫理性にも関心が寄せられています。海外からの研修参加者や留学生の企業訪問やインターンでは、経営者が目指すところの日本式経営哲学や職場倫理も、常に関心の高いテーマです。

ある留学生が、大学で日本の友人の多くが、両親や親戚、そして学校の先生から「人に迷惑をかけなければ、自分がなりたいどんな職業に就いてもよい」と教えられたことがあると聞いてとても感動したこと、それによって日本では、町や村の大多数のふつうの日本人一人ひとりが、たいへん立派な人たちである理由を理解した、と帰国前の挨拶で述べたことがあります。「常に他者のことを考えている」ことはたしかに日本人の身についた行動の判断基準で、日本人の美徳の一つだと考えられています。しかしながら時として、周囲に配慮するあまり重要な判断や発言を逸して、取り返しのつかない重大な失敗にもつながりやすく、日本国内外でも議論があるところです。

そうではあっても、日本に住む海外の方々も、日本に滞在する間は日本の風土に染まり、相手のことにもまず思いを馳せ、人が迷惑に思わないか、人が嫌がらないか気遣い、譲り合う文化と社会が心地よいと考えてくださっているでしょう。

技術刷新を絶え間なく必要とするグローバルな経済競争と、一方で哲学的に倫理的に豊かな社会を維持することは、日本で、そしてそれを望むどの国と地域でも両立が実現できるのだと、国際協力・国際交流の場で、共に学び激励し合いたいと思います。

1977 ▸ 2017

JICEのあゆみ

一般財団法人　日本国際協力センター（JICE：ジャイス）は、国際協力の推進を目的に1977年に設立され、2017年に40周年を迎えます。国際研修、国際交流、留学生受入支援、多文化共生、プロジェクト支援といった事業を通して日本の技術、知識、経験を世界に伝え、さまざまな国の将来を担う人材の育成に取り組んできました。

これまでの知見と国内外のネットワークを活かし、これからも世界の人々と共に学び合い、理解を深めながら、平和で豊かな国際社会の実現に貢献します。

1977

1987 10年

1997 20年

2007 30年

2017 40年

1977年3月25日
「財団法人 国際協力サービス・センター」として設立

1993年2月1日
「財団法人 日本国際協力センター」に名称変更

2013年4月1日
「一般財団法人 日本国際協力センター」に名称変更

設立

1977年
研修

JICAが開発途上国の国づくりに必要な人材を研修員として受け入れ、専門知識や技術の移転を行う研修員受入事業を支援するのが「研修監理業務」です。研修監理業務は、研修の現場（講義、視察、実習、討議など）で、JICA、研修実施機関、研修員の間で発生するさまざまな調整業務や通訳業務が主な業務です。これらを担うのが「研修監理員」です。JICEでは研修監理業務のほか、日本語研修や、教材作成などの業務も実施してきました。

1984年
交流

1984年に開始された青年招へい事業「21世紀のための友情計画」において、JICEの研修監理業務の経験が活かされました。JICEは、事業開始当初から、日本理解のための講義、日本語学習、視察の企画・運営、プログラム監理業務を担当しました。

1999年
留学

1999年に開始された「無償資金協力による留学生支援事業（Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship: JDS）」において、事業開始当初より JICEは相手国政府の実施代理機関として、現地の留学生の募集選考から事前研修、日本への渡航手続き、来日オリエンテーション、来日中の留学生のモニタリング、生活支援や突発対応などの留学生受け入れに関連する一連の業務を担当してきました。

2009年
多文化共生

2008年9月のリーマン・ショック以降に本格化した不況は、海外から日本に生活の拠点を移した外国人にも深刻な打撃を与えました。この状況を改善するため、2009年に厚生労働省は「日系人就労準備研修」を開始しました。JICEは事業開始当初より本事業において、就労に必要な日本語や知識を習得させ、自律的な就職活動の支援を行っています。

国際研修

海外から研修生や視察者を招いて行う国際研修を運営します。研修内容の企画立案から研修全体の進捗管理、通訳、同行、さらには研修生の理解を深めるためのファシリテーションなど、目的に応じた対応を行います。日本の技術や経験を研修生の国の課題解決に役立てるために、研修生の要望をできる限り反映した研修プログラムを実施し、それぞれの研修生の目標達成を支えます。

国際交流

世界各国と日本の青少年を対象とした国際交流事業を実施しています。日本各地での学校交流やホームステイ、文化体験など地域の方々と直接ふれ合う双方向の国際交流プログラムや、日本の青少年の海外派遣などの企画運営を行い、青少年の友情と信頼関係を培い、相互理解を促進しています。

留学生受入支援

各大学と連携して、アジア・アフリカや中東諸国などからの留学生受け入れを支援しています。海外及び国内のネットワークを活用して、留学生の募集選考や来日前の手続き、留学中の研究、学業から日常生活のケアにいたるまで、留学生が学位を取得するためのトータルパッケージ的なサポートを行っています。留学生が学位を取得し、多くのものを日本から学び、母国の発展に貢献することを支援しています。

多文化共生

日本での安定就労を目指す定住外国人を対象とした研修を、全国各地の外国人集住地域で実施しています。日本語のコミュニケーション能力の向上、日本の労働法令、雇用慣行、労働・社会保険制度等に関する知識の習得に係る講義・実習を内容とした研修を提供しています。また、外国人住民向けの各種資料の翻訳や、自治体での多文化共生講座などへの講師派遣なども行っています。

その他の事業

JICEでは、約30の言語に対応可能な専門スタッフを国際会議、研修、視察などの現場に派遣し通訳を行う「通訳派遣」、就労時や生活の効果的、効率的な運営支援を行う「プロジェクト支援」、中学、高校、大学等における国際理解教育の支援を行う「開発教育支援」などの為の日本語、ビジネス日本語、学術日本語まで幅広く柔軟に対応できる「日本語講習」、日本の援助機関などが開発途上国等で実施するプロジェクトも実施しています。

海外援助は“票”にならない それでも続ける理由がある

文＝三原 朝彦（Asahiko Mihara）

20代で触れたアフリカ

JICEの40周年を心よりお祝いし、山野幸子理事長はじめ関係諸兄姉の永年にわたる国際貢献に対し深甚な敬意を表します。貴センターの地味ながら堅実な活動が、わが国援助政策にもたらした成果は誠に偉大なものがあります。次の40年が更に価値を深めての活動である事を私は祈念致します。

貴センターほど崇高な志を持って動いてきたわけではありませんが、私も聊（いささ）かなりともわが国の海外援助に対し理解を示し、手伝いをしてきたと自負しております。そういえば国会議員の立場をいただいて30年になりますから（残念ながらそのうち10年は落選中でした）その間、何らかの形で開発途上の国々への支援活動をしてきた事になります。東南アジアの国々はほとんど、中南米の国々は半分くらい、そして私が焦点を当ててきたアフリカ諸国は総計54カ国のうち33カ国を訪ね現場主義に徹しながら訪問国に何が欠けていてどうすれば国の発展が図れるかを見聞し、学んできました。

なぜ、私はこれらの国々の動向に興味を持ち眼を向けるようになったのでしょう。実際政治に身を置く者として海外援助というテーマは地元選挙民にとり最も利害関係の薄い、いやそれのみならず最も人気の低い課題であり、それ故に俗っぽく言えば「票にならない」政策なのです。にもかかわらず、この問題に私が固執するのは私の青年時代の実体験による強烈な印象に始まるのです。

私は北米留学をしている時、アフリカを訪れる機会を得ました。それは1973年夏のことでした。エチオピア出身のアレム君という友人の故郷は、今は分離独立してエリトリアの首都になっているエチオピア第2の都市アスマラでした。彼はいつも故郷の話をしていて、特に「主食のインジァラ（テフという粟、高粱の類を原料にする発酵させたパン）が食べられない」と、来る日も来る日も食事の折に不満を聞かされたのを今も思い出します。

強い動機とてなく、只々（ただただ）友人の助言の後押しで、開発途上国視察の旅が始まりました。強いて言えば一つ目的があって当時米国のピースコアーを真似てわが国に青年海外協力隊が発足し、世界の各国で活動を始めたところでしたので、彼等の現場を訪ね、簡単なレポートを書こうとは思っていました。アレム君が彼等はエチオピアで活動していると教えてくれたのでエチオピアまで行けば何とかなるだろうと私は暢気且つ無謀にも機上の人となり、イタリア経由でアフリカの大地に降りたったのがアスマラでした。アスマラでは残念ながら青年海外協力隊員に会えずに、ポンコツのジープの持ち主のイギリス人青年と仲良くなり、燃料代を半額持つ約束で次の目的地ゴンダールまで同乗させて貰いました。幸運にもここで現地の人から日本人の存在を聞き、小さな町ですから早速押しかけました。そこで望み通り協力隊員のT君に会い、居候を決め込みました。T君は私と同年齢、高校の生物の先生を休職して協力隊員となり、WHOが指導する天然痘撲滅運動の最前線で予防の為の種痘の実施活動をしていました。彼の責務をテーマにすればレポートに打って付けです。早速、私は彼に頼み、一緒に種痘キャンペーンの村巡回に同道することになりました。

ドロ水を飲みながら 世界平和の土台を知る

さあ出発、と言っても山また山の地形ですから車は勿論の事、オートバイでも無理、頼るは自らの二本の足で歩くのみ。地元の道案内人に食料や簡易テントと寝袋を背に載せたロバを引かせ、高校卒業した許（ばか）りの少し英語を話せる若者を通訳に連れての旅の始まりです。夜明けから日暮れまでポツンポツンとある小さな集落を訪ね、種痘の必要を説いて村人を納得させ、T君が針を腕に打ちます。しかし皆が同意するわけではありません。怪しい日本人がよからぬ事をすると思う人も少なくありませんし、土着の迷信に頼って種痘を絶対に受け付けない人もいます。こうして1日20〜30kmは歩いて、遂にはもう一山越えるとスーダンの国境という所まで行きました。

本当にあの頃はT君も私も若かったし、元気でした。乾期でドロ水しか手に入らなくても煮沸して飲んだし、2週間の旅の間、顔も洗わず痒くなった頭を掻きながら使命感に燃えて活動しました。そんな活力を得たのも貧困の極で生活する村人の苦労を目の当りにして何とかしてあげたいと思ったからです。天然痘特有の症状で顔中アバタだらけになり、あと数日の命と思われる息たえだえの幼な児を腕に、為す術もなく見つめる母親の姿に接すると、自らの無力と天の不平等に私は絶望的にならざるを得ませんでした。キザなようですが、この実体験こそが私の政治活動の基本です。大国日本の一政治家として、開発途上の国に生きる人たちへの配慮が世界の平和と安定の第一歩と信じ、微力であってもその意志を忘れる事なく歩んで来たのです。これからいつまで働けるか判りませんが「初心忘るべからず」の精神で頑張ります。

第5回アフリカ開発会議（2013年）で表明された「アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ」の研修生と懇談する三原氏。同プログラムは5年間で1000人のアフリカの若者に日本の大学・大学院での教育および企業でのインターンシップ実習の機会を提供することで、アフリカの産業開発を担う人材育成と日本との人脈形成に資することが期待されている。

2016年9月に神戸で開催された第2回アフリカビジネスセミナーで来賓挨拶する三原氏。

一橋大学卒業後、アメリカのダグ・ハマーショルド大学の実験学級に1年留学後、カナダのカールトン大学大学院国際関係学科に留学し南北問題を専攻。留学中に東アフリカ3カ国を訪問した（右端が三原氏）。その経験が、国際協力に貢献する政治理念の萌芽となった。

三原 朝彦／衆議院議員。衆議院原子力問題調査特別委員長。福岡県生まれ。一橋大学法学部卒業、カールトン大学大学院国際関係学科修士課程修了。日本・アフリカ連合友好議員連盟会長代行。

日米関係から見た国際理解の促進

文＝グレン・S・フクシマ（Glen S.Fukushima）

同じ行動でも評価の異なる日米

私がスタンフォード大学と慶應義塾大学との交換留学生として日本に留学していた時、以前交換留学生としてカンザス州リーウッドの高校に通っていたある慶應の女子学生が私に言った。「授業中に発言せずに黙っていたら、アメリカの先生や同級生に、授業で討論されている問題に関して無知か意見がない生徒だと思われてしまった」という。実際彼女は大抵の問題に関して知識もあり、意見も持っていたのだが、「日本の高校では、生徒は先生が言うことを聞くだけで意見を言ってはならないと教育されてきた」との説明だった。

しかし、アメリカの高校で1年がたった頃には、自分の意見を発言する能力を身につけ、クラス討論にも積極的に参加するようになった。ところが、日本の高校に戻ってからも同じような振る舞いをしたところ、とたんに先生や同級生から、授業中は黙って先生の話を聞くものだということを知らない無知な人間だとして白い目で見られたそうだ。彼女がそこから得た教訓は、「アメリカと日本では、同じ行動をしても、両方の国で“賢い人間”だと思われるわけではない」ということだった。

この話は、人の前で「はっきり発言する、明確に論理的に確信を持って意見を言う」ことに対する日米の評価の違いをよく表しているので、ずっと私の記憶に残っている。アメリカでは、教育のある人は、議論や討論に参加することを求められるし、リーダーは、その定義からして、効果的なコミュニケーション能力が必須要件である。こうした価値観は、日本でも徐々に理解されてきてはいるが、スピーチをしたり、プレゼンをしたり、議論をしたりすることを優先する日本の学校や会社は多くない。実際、日本人の中には、あまり喋り過ぎると、口達者とか思慮が浅いと思われるだけで、重要なことは、言語ではなく実際の行動によって示すべきだと考えている人も少なくないようだ。

このようなコミュニケーション様式の違いとその底流に流れる文化規範の違いの中で、日本はいかにして世界の国の理解を得たり、また国際社会に貢献することができるのであろうか。そのためには3つのアプローチがある。まず、第一に、外国語で効果的なコミュニケーションができる日本人を育成すること、二番目に、日本を理解する外国人を育成すること、三番目に、日本を理解する外国人の中で、外国人に分かるように日本のことを説明できる人を育成することだ。

日本のことを日本以外の国に説明するのは必ずしも簡単ではない。私自身も、アメリカ国籍の日系三世として、学生時代から、学問、ジャーナリズム、法律、政府、ビジネスの分野で日米間の仕事に関わってきた。私の経験では、日米の価値観は対極にあるように見える。日本の価値観は、集団や組織、秩序、安定、継続性、確実性、予測性、前例、協調性、統一性、同質性、ヒエラルキー、コンセンサス、現職者、リスク回避を優先する。一方、アメリカは、個人、変化、ダイナミズム、分断、激動、自発性、イノベーション、多様性、異質性、議論、参加、新参者、創造的破壊、そしてリスクを取ることに優先価値を置く。この差を埋めるのには常に努力しなければならない上に、時には感謝されないこともある。

ポピュリズム、ナショナリズムに飲み込まれない理解を築くために

しかし、この日米の差が理解できれば、他の国の社会を理解しやすくなる。なぜならば、日米間の差は両極端に位置し、他の先進工業国はおおむねその間のどこかに位置するからである。例えば、コーポレート・ガバナンスを例にとると、アメリカ企業は社外役員の割合が最も高く、日本は最も低い。他の国はその中間に位置している。銃規制の問題では、アメリカは先進7カ国の中で最も銃規制が緩いが、日本は最も厳しく、他の国はその中間にある。移民問題でも、アメリカは、先進7カ国のうちで移民の受入率は最も高いが、日本は最も低く、他の国はその中間である。このような事例は他にも少なくない。

私が言いたいのは、一連の政策や実施方法が異なるからといって、どちらが優れているという優劣の問題ではない。それぞれの方法は、その国の歴史、価値観、好みを反映したもので、それぞれに短所も長所もあるからだ。日米の文化的規範は違っていても、両国は、共通の政治的価値観や制度をもち、ともに経済や技術革新に重点を置いていることにおいて多くのことの共有が可能であり、それが、日米の持続的な経済的パートナーシップ、政治安全保障同盟の基盤となっているのだ。

ヒラリー・クリントン前国務長官を主賓に招いたニューヨーク市内での夕食会にてビル・クリントン元大統領と前長官とともに（2015年12月撮影）。

フランス最高のワインより上位と認定された「パリの審判」受賞のナパ渓谷・シャトーモンテレナワイナリーにて咲江夫人と。

著名な美術品収集家ノーマン、ノラ・ストーン夫妻とサンフランシスコ現代美術館リニューアル大開館式にて。

この点で、JICEのような組織が果たす役割は不可欠で重要である。海外から学生や若手プロフェッショナルを日本に招へいし、日本の若者と交流する機会を提供することによって、JICEは、日本人と外国人がともに学び、行動し、ただ教室でお互いの言語と文化を勉強する以上に深く理解し合うことができる場を提供している。過去40年間JICEは、留学生の受け入れ、国際研修プログラム、文化交流プログラムを通じて、世界の多くの個人、機関、国に対して幅広い活動を行うことを通して、人材の育成と世界のあらゆる地域の人々の日本に対する理解促進の双方において素晴らしい貢献をしてきた。

旅行や出張の機会の増加や、情報技術の進展が進んでも、真の国際理解は簡単ではない。特に、ポピュリズムやナショナリズムが一部の国で台頭している昨今では、なおさらである。こういった意味でもJICEの役割の重要さは増すばかりである。JICEはこの40年間世界に多くの友人と支持者を得てきた。我々海外のJICEの友人は、JICEの活動が将来ますます拡大し、活発になり、次の40年間も国際理解促進への貢献が飛躍的に高まることを期待している。

グレン・S・フクシマ／カリフォルニア出身の日系三世。スタンフォード大学、ハーバード大学、慶應義塾大学、東京大学で学んだ後、学問、ジャーナリズム、法律、政府、ビジネスなど多岐にわたる分野で活躍。現在は、ワシントンDCにあるシンクタンク「米国先端政策研究所」の上級研究員。

外交を支える個人の力

文＝谷口 智彦（Tomohiko Taniguchi,Ph.D.）

米中外交を担ったある女性

以前ニューヨークで、米中民間外交を最も早くから担ってきた人物に会ったことがある。どれほど早くからかというと、キッシンジャーやニクソンが訪中する前、そこに至る道を「ピンポン外交」がつけようとしていた頃からだ。初めて訪米する卓球選手団を受け入れるところから、携わってきたという。

これが一目見ると忘れられない人物で、髪の毛は総白髪、背中にかけて伸ばし放題にしたところは「白髪三千丈」という比喩を想起させた。何千という中国人に会い、米中関係を支えてきたのは、そんなある、世間一般にはごく無名の女性だった。

二国間関係を支えるのは、いつの世も人と人との交流である。これこそは外交の血となり、肉となる基盤であるというのに、これくらい、組織として例えば外務省や国務省が扱うのに難しい仕事もない。

人間に会い、話して、記憶する仕事は、くるくる担当者が入れ替わる組織に委ねると、たいがいろくなことにならない。たとえ記録がファイルに残ったとしても、感情は消えてしまう。そして人的交流の精華とは畢竟（ひっきょう）、喜びや感動、それが築く友情を育てるところにある。感情を扱う仕事である。米国においても事情に変わりはなく、米中の人的交流には、その根っこに、組織でなく個人がいた。数十年変わらず献身する、一女性の存在があったわけである。

JICEの歩みは日本外交の資産

山野幸子氏と、彼女が育てた JICEの活動に接するたび、同じ真理を日本も知らぬわけではなかったことを思い、心丈夫になる。JICE にはきょうも、将来日本にとって頼もしい友人になってほしい人々の記録が加わり、ある具体的感情を帯びた記憶として蓄積されている。

JICEは外務省の促進する対日理解促進交流プログラム「KAKEHASHI Project」の実施を受託している。同プロジェクトの目的は、日本と北米との間で活躍が期待される高校生・大学生・若手研究者を招へい・派遣する交流を通して、日本の政治・社会・歴史および外交政策に関する理解を促し、日本の魅力を発信してもらうこと。谷口氏は2016年2月、ブルッキングス研究所およびアメリカ進歩センター（Center for American Progress）からの若手研究員を前に、1960年代から現代に至る盤石の日米関係について論じた。

1977年というと、日本が先進自由民主主義経済国の一翼として地位を固め、東南アジアなどで、ようやく自分のアタマで考えた外交を追い求め始めた時期に当たる。同じ年、小さく発足したJICEは40年の歴史を刻んだ。その間、JICEのメンバーたちに、積み重ねられていった人々の記憶こそは、およそ価値のつけようのない資産である。JICEの資産であるばかりではない。日本外交全体にとっての資産だ。

何かを学ぼうと日本を訪れる人々は、日本に自発的・積極的関心を抱いてくれている限り、その出自にかかわらず日本が大切にしなくてはならない将来の友人・理解者である。JICEは、彼らを分け隔てなく遇し、どこから来た何国人であろうが差をつけない。これがごく普通の人間にとって、どれほど難事か少し想像してみればわかる。それを40年、続けたのが JICE である。こうべを垂れて敬服する以外、ふさわしい態度を知らない。

日本は、山野氏と JICE をもてて幸運だった。設立40年をことほぐとともに、JICEの仕事に、一層の発展があることを祈念したい。それは、日本外交のさらなる伸長を願うことと、まったく同義だといって差し支えないからである。

谷口氏は、自身公言しないが、安倍晋三首相が外国向けに語る演説のスピーチライターとして知られる。

2016年米国大統領選後、トランプ次期大統領と会談する安倍首相に同行。会談前にBBC New Yorkスタジオで日本の外交政策についてインタビューを受ける谷口氏。

TICAD VI（第6回アフリカ開発会議・2016年）を終え帰国途上の政府専用機内。

谷口 智彦／内閣官房参与、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授。博士（安全保障）。ジャーナリスト時代に米プリンストン大学フルブライト客員研究員、ロンドン外国プレス協会会長など歴任。『明日を拓く現代史』など著書、訳書がある。

在日本ケニア共和国特命全権大使、ケニア共和国TICAD担当特使、TICAD VI事務局長からのメッセージ

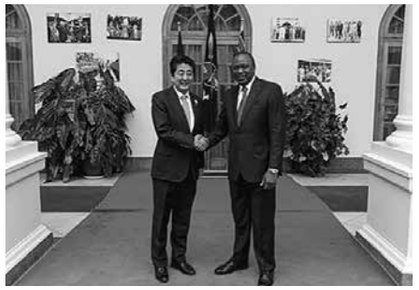
文＝ベンソン・オグトゥ（Ben H.O.Ogutu）

第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）の成果

ケニアと日本の関係は、1963年にケニアが独立を果たした時に始まりました。両国間の関係はJICA、JETRO、JICEなどの機関を通じて、実り多いものになっていると思われます。ケニアと日本の関係は主に、相互利益および継続的協力への可能性を踏まえたものです。

このような関係は、経済インフラを発展させるための政府開発援助（ODA）と技術協力を通じて築かれてきました。例としては、モンバサのドンゴクンドゥ地区における経済特区の開発、モンバサ港の拡大、農業開発、Jomo Kenyatta農業技術大学（JKUAT）をはじめとするケニアの大学とのパートナーシップを通じたイノベーションと工業化の促進に必要な人材の開発、アフリカの若者を対象とした産業人材育成事業（ABEイニシアティブ）を通じた両国間の産業発展の橋渡しとなる事業、医療分野での援助、農業と気候変動への対応などが実施されています。

TICAD VIは「アフリカの持続可能な開発アジェンダ促進：繁栄のためのTICADパートナーシップ」のテーマの下、2016年8月28日から29日までケニアのナイロビで開催されました。この会議では、経済の多様化と工業化を通じた経済の構造改革、生活の質の向上を目指した弾力性のある医療制度の推進、繁栄を共有するための社会的安定性の促進という3つの分野が重点的に扱われました。



TICAD VIは、2016年8月28・29日にケニアのナイロビで開かれた。

首脳国会議ではナイロビ宣言、ナイロビ実施計画、TICAD VIビジネス宣言が採択されました。これは今後3年間でのTICAD VI目標の実施を図るためのロードマップとなるものです。また、アフリカにおける包括性および活力を検討した2013年の横浜行動計画との差を埋めるものでもあります。

会議をアフリカで開催することにより、TICADのプロセスにアフリカ色を与える機会となりました。また、TICADの根底にある原則「アフリカのオーナーシップ（自助努力）と国際社会のパートナーシップ（協調）」が再確認されることにもなりました。さらにこの会議により、アフリカの諸問題や好機など、アフリカの現実を日本の皆様に理解してもらうための討論の場がもたらされたほか、アフリカと日本の実業界の幹部が出会って緊密なパートナーシップを構築する絶好の機会がもたらされ、TICADの歴史上初めて、民間部門が各国首脳や政府と十分な対話をするフォーラムが設けられました。

ケニアの外交通商省で山野幸子JICE理事長と会談するオグトゥ大使（右から4人目）。

今回、ケニアでTICAD VIを開催することで、サハラ以南に対する日本の経済協力のモデルとして、ケニアを発信する機会を得ることができました。また貿易相手国、観光目的地、投資先としてもケニアの知名度を上げることができました。このような類まれな会議をケニアで開催したことは、ケニアが国際的に認められている確かな証しであり、アフリカが必要としている変革の重要な指導役にケニアが深く関与していることの表れでもあります。

ABEイニシアティブ

ABEイニシアティブは、ケニアの官民双方の若者の地位を向上させることを狙ったもので、成功している取り組みであると評価されています。2013年のTICAD Vで開始されて以来、ケニアが最大の恩恵を受けてきました。

ABEイニシアティブは、アフリカが日本の民間部門からの参加を求めていくうえで特に重要なものです。アフリカ経済に関心のある日本の投資家たちは、ABEイニシアティブの参加者の中から人材と技能を得ることができます。そして、そのような人々が、日本滞在中に学んだ技能を経済活動の中で発揮していくのです。

ケニアはJICEがアフリカでABEイニシアティブの運営支援機関として重要な役割を果たしていることを認めています。このことは、JICEがケニア政府とJKUATとの間に築いている有意義な関係を見れば一目瞭然です。人材開発の取り組みを支援するうえでJICEが果たしている役割は、アフリカの若者の地位向上に重要なものだと考えられています。たとえば、2016年にJICEは、ケニアと日本に橋渡しをして未来のビジネスリーダーを育成すべく、JKUATで7月4日～15日まで2週間にわたり、「日常生活と大学生活のための基礎日本語」コースと「職場での基礎日本語」コースという日本語集中講座を実施しています。

最後に一言申し上げます。日本はこれまでずっとケニアに限らずアフリカ諸国の重要なパートナーでした。ケニアと日本の二国間関係は開発に基づくものであり、この関係のおかげでケニアは社会インフラと経済を発展させることができました。

ベンソン・オグトゥ／ケニア共和国外務省TICAD担当特使、TICAD VI事務局長。1990年代に在東京ケニア共和国大使館の一等書記官として勤務し、2010年から2014年まで、在日本国ケニア大使を務めた。

人的交流と日本の課題

文＝大鷹 正人（Masato Ohtaka）

自らの姿を自覚できる日本であるために

国際的な人的交流の重要性や日本・日本人の国際化の必要性が叫ばれる中で、40周年の節目を迎えたJICEの役割は、さらに大きくなっていくと考える。そして「日本・日本人の国際化」という視点からは、日本が抱える課題などについてしっかり問題意識を持つ必要がある。この関連で、最近、私にとって印象に残る会話が三つあった。

一つは、ある長期派遣型プログラムに参加した方々を集めたレセプションでの会話である。このプログラムは、日本の若手（大学生を含む）からシニアの方々まで幅広くアジア諸国などに日本語講師として約1年間派遣するものであり、素晴らしい成果を挙げている。プログラム参加者から直接いろいろな話をうかがった中で、多くの方々が「外国から戻って日本の良さだけではなく欠点も目につくようになった」と述べていた。たとえば、日本人は礼儀正しく親切であると思われているが、外国から戻ってみると「街中の日本人の表情が険しい」、「雰囲気が殺伐としている」、「電車の席を譲るような親切さが見られない」、「黄色信号でアクセルを踏む」と感じるというのである。これらは日本人にとっては当たり前のことかもしれないが、外国と比較すると「違う」あるいは「おかしい」ことである。彼らは長期派遣先の国々で1年ほど過ごした結果、現地の感覚や視点が身につき、外から日本・日本人を見られるようになったということである。このように海外生活や国際交流は、人の視点や発想、場合によっては人生観に影響を与える。たとえば、JETプログラムの参加者と話すと、同プログラムから母国に帰国して考え方や関心の変化によって友人関係が大幅に変わったという話をよく耳にする。人的交流を通じて人は新たな知識や経験を身につけて一種の進化をするようなものである。日本が内向きであり、ガラパゴス現象が多く見られるなどと指摘されているなか、日本人自身が少しずつでも進化して「外から見た自らの姿」を自覚していくためには、国際的な人的交流は最も重要な方策と考える。

もう一つは、帰国子女や多文化的な背景（親が日本人ではないなど）を持つ学生との集会での会話である。小・中・高校を海外で過ごした者、あるいは異なる文化・民族的背景を有する親を持つ者などは、異なる文化の間を往復・経験することによって視野が広がり、固定観念にとらわれないと言われている。その一方で、そのような者は母国でも居住国でも社会や仕組みになかなかなじめないといった困難に直面することが多い。これは、程度の差はあるが、どのような国や社会においても存在する問題である。ただ、この集会において多くの参加者が語っていたのは「日本は米国などの外国と比べて、異文化・異人種の者が溶け込みにくい国である」と感じているということであった。日本人は親切であることは間違いないが、普通の日本人と内面や外見が違うというだけで、一種の心理的な壁が感じられ、「人対人」の普通の関係を構築しにくいとのことである。総じて日本人は、日本の地理的・民族的・歴史的な特性のために、いまでも異なる文化・民族的背景を有する者との接触・交流に慣れていない。感覚の鋭い帰国子女は、このことを強く感じ取っているのである。この集会に参加した者は、人的交流によって日本人が外国・外国文化と接する機会を増やすことが必要であると異口同音に述べていた。

内向き志向の若者を国際化するには

三つ目はある有名な元プロ・テニス選手との会話で、若者の内向き志向について話していた際、「日本の大学生テニス選手はレベルが高く、米国の有力大学からもスポーツ留学生として受け入れたいという打診があるものの、選手のTOEFLの点数が不十分のためこの道を選択できない」と言われた。留学は若者の国際化にとって最も中核的な選択肢であるが、英語力が一つの障害になっているということである。私が在米国日本国大使館にいた際、ワシントン近辺にいた日本人留学生の集いを何度か開催したが、そこでも留学生の多くが英語力の不足から来る不安を訴えていた。常に指摘されていることであるが、日本の中学・高校の英語は、受験を念頭に置いた内容がまだまだ支配的で、コミュニケーションを主とするものではない。入学試験におけるTOEFLやTOEICの採用も十分進んでいない。若者の国際化が進んでいる国の例としてインドが挙げられるが、インド人の多くは欧米に留学ないし移住して欧米で活躍している。無論、インド国内で魅力的なキャリア機会が相対的に少ないことなどが彼らをハングリーにしている面もあるが、母国の公用語が英語であり、語学面でハンデがないことも有利に働いている。日本の英語教育は、近く小学校3年生から開始され得ることとなるが、修学年数というよりも教え方の改善（上述の受験英語の問題を含む）に取り組まなければ、日本人の英語力を本格的に引き上げることは難しいとの意見も強い。これは難題であるが、日本が国際化を進めるにあたって喫緊の課題である。

日本・日本人の国際化を進めるには、日本人が外の世界に興味を持つことが不可欠であり、なるべく若いうちから外国への関心を抱くことが重要であることは言うまでもない。大学等に進学してから留学について考え始めるのでは遅いのである。その観点から、AFS、ロータリー・クラブ、YFU、日中心連心のような高校生の留学スキームが存続することはとても大事であるが、きっかけを作るという意味で、JICEが事業実施に協力しているKAKEHASHI Project や JENESYS などの青少年短期交流事業も重要である。最近では、KAC（Kizuna Across Cultures）のように、インターネットを駆使して日米の高校間の交流を進めるような取り組みも行われている。このような事業は今後も大いに奨励されるべきものと考える。

日本が国際化を進めるに当たってのいくつかの視点と課題について述べたが、最後に人的交流事業を継続・運営することの難しさを強調したい。予算・資金の確保、参加者の募集、受入先の確保、プログラム内容の策定・アレンジ、プログラムの実施などなど一つの交流事業を行う上で大変な意志と努力を必要とする。このような人的交流の前線におけるJICEの長年の活躍に敬意を払うとともに今後のさらなる活躍に期待したい。

外国文化と接点のある学生（third culture kids/cross-cultural kidsとも称される）を集めての意見交換会。

日本語を学ぶ中国の高校生30数名を約1年間、日本に招く「心連心」。高校生たちはホームステイや寮生活をしながら地域の高校に通い、日本各地で個人レベルの信頼関係が育まれている。

大鷹 正人／外務省大臣官房報道・広報・文化交流担当参事官／外務副報道官。東京大学経済学部経済学科卒、タイ公使、米国公使などを歴任。2016年より現職。

中東諸国との交流を通じて

文＝浦田 秀行（Hideyuki Urata）

基礎研究と人的交流には共通点がある

2016年も日本人がノーベル医学生理学賞を受賞し、日本人のノーベル賞受賞者は25人目となった。日本人受賞者数は、自然科学分野に限れば、21世紀以降米国に次ぎ2番目の受賞者数を誇る。

私は、ずいぶん長い間、中東諸国との関係強化の仕事に携わってきたが、人的交流と基礎研究には似たところがあると思っている。近年のノーベル賞受賞者の業績は、数十年前の基礎研究の成果であることが多いが、二国間関係において人的交流が果たす役割もこれに似ていて、その成果が現れるまで、ずいぶんと時間がかかる。もっと言えば、2016年の日本人ノーベル賞受賞者である大隅良典東京工業大学栄誉教授が、ダイレクトな成果至上主義に警鐘を鳴らしたように、二国間の人的交流にあたっても、見返りを求めすぎないことが必要なのかもしれない。いずれにせよ、人的交流の厚みこそが関係強化の鍵であり、そのための時間や労力を惜しんではならないことは間違いない。

私は、在クウェート日本国大使館や在イラク日本国大使館勤務時代には、日本企業が現地で抱える問題を解決するため、商工省や石油省、財務省といった現地の役所に毎日足繁く通った。そこには、いつでも快く私を迎えてくれ、相談や議論に応じてくれる50代から60代の幹部職員達がいたが、その多くの人々は、1970年代から80年代に日本に長期

アブダビ政府関係者と経済協力に関する協議を行う浦田氏（写真左）。

滞在し、プラントメーカーやエネルギー関係企業などで研修を受けたことのある人々だった。助けられた私が、その当時の日本での研修担当者に感謝することになるなど、研修担当者達は全く想像もしていなかったのではないだろうか。このように長期的視点で取り組まなければならない人的交流が、今日（こんにち）、十分幅広い分野をカバーしたものになっているかどうか、よく点検しなくてはならない。現在の重要分野が、数十年後も重要分野とは限らないからだ。人的交流は未来への投資であり、投資である以上、一定のポートフォリオが必要だ。

また、中東諸国はダイナミックに発展している。石油やガスに依存しない経済を志向し、金融、物流、医療、教育、航空宇宙などのハブを目指してお互い競い合っている。エネルギー分野に限っても、石油やガスに加えて、原子力や再生可能エネルギー、水素など、オプションを増やす努力が本格化している。人的協力も、こうした幅広いニーズに応えられるものになっていかなければならない。

雄大な自然景観と食の魅力にあふれた北海道は、エネルギー分野でも多様な取り組みが行われており研修受け入れ適地といえる。写真は大雪山系旭岳。

現在、私は、北海道経済産業局において、エネルギー環境行政の責任者を務めている。その立場で、エネルギーの恩人である中東諸国に少しでも役に立ちたいと思い、ささやかな努力をしている。2016年の夏、JICEが主催する中東の学生向けインターンシップ事業の一部を、我が北海道で開催してもらった。昼は、北海道のエネルギー事情について講義をし、夜は、JICE主催のレセプションに北海道の美味しい食材を提供させていただいた。そうした取り組みを進める中で、北海道が、海外からの研修生を受け入れる場として、思いのほか多様なニーズに応えられることに気がついた。エネルギー分野に限ってみても、北海道では、石油、ガス、石炭といった化石燃料の開発、生産がいまだに行われていることに加え、原子力発電所も立地し、風力、地熱、太陽光、バイオマス等の再生可能エネルギーの開発、利用も急速に進んでいる。北海道の日本海側は風が強く、日本で最高の風力の適地であり、大規模な発電事業、開発事業が行われている。火山の数も日本一で、いたるところで地熱資源の開発が進められている。気候が冷涼なので意外に思われるかもしれないが、北海道東部は日照時間が長く、土地も広いのでいわゆるメガ・ソーラー発電の適地であり、多くのプロジェクトが近年発電を開始している。広大な森林を擁し、日本一の酪農地帯でもあることから、木材や家畜糞尿を利用したバイオマス発電所が相次いで建設されている。また、不安定な再生可能エネルギーの出力を制御するための蓄電池技術の実証試験や、余った再生可能エネルギーを活用して水素を製造し、貯蔵、利用するための実証試験、二酸化炭素を海底下に貯留する実証試験など、多くの先進的な取り組みも進められている。それらに加え、広大な自然、夏期の冷涼でさわやかな気候、美味しい食材など、海外からの研修生を魅了してやまない素材が揃っている。研修の大事な目的の一つが、日本のファンを増やすことであるとすれば、まさに北海道は研修の「適地」であると言えるだろう。

最後になったが、JICEが人的交流の実行機関として、重要な役割を果たしておられることに敬意を表したい。私が資源エネルギー庁資源燃料部勤務時代に、アブダビの教育交流で中心的役割を果たしていただいたのはJICEである。この教育交流は短時間の間に大きく前進し、極めて大きな成果を挙げたと私は自負しているが、その最大の要因は、アブダビの教育行政の最高幹部達を日本に招請した際、JICEが綿密なプログラムを用意し、きめ細かなサポートをしたことで、訪日した幹部達が日本のファンになったことであると考えている。

今後、JICEのプログラムを通じて、北海道で学び、楽しんだ海外の若者が、数十年後に日本との関係強化に貢献してくれれば、これ以上の喜びはない。

浦田 秀行／北海道経済産業局資源エネルギー環境部長。京都大学大学院工学研究科修了後、通商産業省（現・経済産業省）資源エネルギー庁入庁。在イラク日本国大使館の参事官、同庁石油担当企画官など、中東地域における日本の資源エネルギー政策の現場にて要職を経験。

北京で日本の国際化を想う

文＝白 智立（ハク・チリツ／Bai Zhili,Ph.D.）

「優しさ」と「組織化」その恩恵に支えられて

80年代末から90年代中頃まで日本に留学し、帰国してから2017年でちょうど20年目になります。留学していた間、日本ではまさに国際化が進展していく最中で、私がその恩恵を受けた一人です。21世紀に入った中国、その経済の発展とともに、国際化も喫緊の課題となり、ここで改めて日本が国際化を進めた時代を想うに至りました。

当時の日本は社会を挙げて、国民全体で国際化を進めたと感じられます。最初に、もっぱら中国人留学生を受け入れる三重県大内山村（市町村合併で現在大紀町と改称）にある大内山塾に留学できたのもそのおかげです。有名な松阪市や伊勢市に近い、当時過疎村であった大内山村で2年間も生活できたのは私にとってかけがえのない貴重な経験でした。2014年、懐かしい大内山村と塾の跡地を訪ねて、80歳過ぎた元気な元村長ご夫婦とも再会できて、胸にこみ上げるものがありました。

その時、日本の一人ひとりが積極的に私たち留学生を支えていたのです。それから、大学が教員を含めて非常に親切に留学生に対応しました。それは日本人学生以上に、私たちに接したと言っても過言ではないくらいです。また、学校の留学生向けの学費軽減制度など制度的にも整備され、多くの人は無事に学業を終えて、日本に就職したか、あるいは私のように帰国したのです。

数年前、東京で開かれたある学術会議に参加したとき、福田康夫元首相にお目にかかることができました。福田さんは多くの外国人観光客の来日に関連して「日本人が優しいから、外国の方が日本に来ると、きっと日本を好きになる」と、ほほ笑んで話されました。それを聞いて、日本の国際化とは何かを考えるようになりました。それはたしかに福田さんがおっしゃった日本の方が持つ「優しさ」そのことではないかと、今、思うようになりました。

本来、国際化とは、外国の人々に対していつも対等・平等の態度を示すことだと理解されています。しかし、日本の方が持っている「優しさ」というのは外国の人々に対して、対等・平等以上のものでありました。相手のことを気にかけて、困った時やそのような立場の人間にいかに手を差し伸べようとするのか、常に考えているのは日本の「優しさ」ではないでしょうか。私はこのような実体験を多く持ち、語り尽くせないほどです。

日中韓の公共政策研究に関する学術会議で、法政大学大学院公共政策研究科長の武藤博己教授と同大学で再会した白氏。武藤教授は恩師である。

もちろん、日本の国際化は日本人と外国人との個人間の出会いばかりではありません。さらに国際化の「組織化」の様相を強く持っています。ここでいう組織化とは、国際化を担う様々な団体の存在そのものです。すでに申し上げました大内山塾や日本の大学などはそうでありますが、日本の多くの団体がこの国際化にかかわってきたのではないかと考えられます。

大内山村で留学した時、すぐ村の方々が中国語のサークルを組織され、留学生を招いて中国語を勉強したりして、緊密な交流ができました。東京で一時アルバイトがないとき、すぐ友人の方々がまた中国語教室を組織し、私を応援してくださいました。

当時、政府の奨学金は金額が高かったものの、受けることができる留学生は数少なかったのです。それで留学生を支えたのは多くの民間の奨学財団の存在でした。私は日本留学中、アジア21世紀奨学財団（ニッポンレンタカー・グループ出資、既に解散）、野村学芸財団、富士銀行国際交流奨学財団（現・みずほ国際交流奨学財団）などから奨学金をいただいてきました。財団は奨学金の授与を行うばかりでなく、多様な活動を展開し、私が帰国してからも連絡をとっていることが多いです。財団組織のおかげで多くのアジアの留学生とも知り合い、多様な活動の参加を通して、私がアジアに目を向けるようになりました。

北京大学政府管理学院に日本から研究者を招き、講義を行う。活発な学術・国際交流に留学時代の人脈が生きている。

強さの理由は学習への熱意と継続にあり

なぜ、「優しさ」と「組織化」を特徴とする日本の国際化がこんなに強いのか。2015年、2回ほどJICEを訪れる機会がありました。JICEも財団組織ですが、私がお世話になってきた奨学財団より規模が大きく、それから一番の特徴は歴史が長いことです。40年という歴史は非常に重いことだと思いつくようになりました。本当の国際化を実現するには長い時間をかけてノウハウなどの蓄積がどうしても必要だと教えられました。

さらに重要なことはJICEの学習活動の熱心さであります。それはJICEから私どもの大学などへの留学経験者が多いだけでなく、勉強会で行政学を専攻する私の堅い話に真剣に耳を傾けるたくさんの職員の姿そのことです。日ごろ、学習・研究に取り組むことも、国際化を進めるのに大切なことだと教えられました。

北京市は数年前「国際化大都市」の建設を言うようになりましたが、しかし最近あまり聞かなくなりました。北京が本当の国際化を進めるには、日本のように時間をかけて、「優しさ」と「組織化」の造成を念頭に、日本のことをいっそう学習・研究する必要があると、かえって北京で北京の国際化を想うようになりました。

帰国後、モンゴルで開かれた日本国際交流基金後援の学術会議で知り合ったP.ナランバヤル氏と白氏（写真左）。

白 智立／北京大学政府管理学院副教授。同大学日本研究センター、人的資源開発と管理研究センター副長を兼任。中国行政体制改革研究会行政文化委員会副秘書長、中華日本学会常務理事。中国内蒙古自治区生まれ。内蒙古大学外国語学部日本語科卒業。法政大学大学院社会科学研究科政治学専攻博士課程修了。政治学博士。著書に『日本の行政監察・監査』など。

4つの視点で考える「日本の良さ」

文＝プレブスレン・ナランバヤル（Naranbayar Purevsuren,Ph.D.）

モンゴル各界で活躍する JICE支援を受けた日本留学生

日本留学の経験者で親日的な国モンゴル国民として「日本の良さ」というテーマを語る以上は、一般的なモンゴル人の対日印象や感情を含めているといえる。とはいえ、多少の私見が混じることを否めない。小生は2016年5月にJICEの招待を受けて、職員を前に講演させていただいたときに、自分の日本観を①アジア初の立憲国家、②戦後復興した技術大国、③平和重視と民主主義の国、④教育の国という4点にまとめて説明した。JICEはモンゴルの多くの若者たちに日本での留学のチャンスを与え、国造りのための人材育成に貢献している。私の友人の中でJICEの支援を受けて留学し、国際機関、政界、経済界、各省庁で活躍している者が多くいる。小生が勤める新モンゴル学園の卒業生たちからJICEの支援で日本に留学した者も既に2、3名いることをここで述べておきたい。

① アジア初の立憲国家

1889年に発布された明治憲法がアジアの国々に与えた影響は大きい。法治国家としての日本の誕生と、近代的な官僚制、不平等条約改正などはモンゴルでも注目された。1924年にモンゴルはコミンテルンの強い干渉を受けて、社会主義思想の憲法を制定したが、その直前までに、明治憲法をモンゴル語に訳して研究するなど、独自の憲法を考える動きもあったようだ。

② 戦後復興した技術大国

日本の戦後復興は目覚ましい。「もはや戦後ではない」という宣言は、民主化移行後、未だに国造りに試行錯誤を繰り返す私たちに自信を与える。被爆国家として廃墟から立ち上がり、技術大国になった日本の経験から学ぶものは多い。また、モンゴルに対する日本の支援は、民主制度作り、人材育成、経済協力など多岐にわたった。日本は世界の開発途上国、特に東アジア諸国の復興や開発に大きく貢献した。

③ 平和重視と民主主義の国

日本は人種差別が少なく、包容力ある国のように思われる。日本の国技である相撲でのモンゴル人力士たちの活躍が目覚ましい。しかし、モンゴル人への批評や嫌味を見せない日本社会はその一例だ。日本の平和重視憲法と非核三原則などは世界の多くの人を魅了し、日本の国際的地位を高めたといえよう。

④ 教育の国

日本の良さの一つは教育にある。モンゴルから多くの若者が日本に留学しているのもそのためであろう。私が校長を務める新モンゴル学園からは、すでに340人にのぼる卒業生が日本に留学している。本校は設立者のジャンチブ・ガルバドラッハ（東北大学に留学）が多くの日本人の支援を受けて、2000年に学校を建て、モンゴル初の三年教育高校を始めた。挨拶の仕方、給食、土足禁止、制服、三者面談、部活、カリキュラム、キャリア教育など日本から学び取ったものは多い。2012年から2016年までのモンゴルにおける民主党政権は、日本の小学校教育指導要領、カリキュラムを検証し、導入を図っている。やはり「国造りは人造り」というように、国際社会造りも平和的教育から始まる。東アジア地域の平和に寄与する人材育成は、日本と各国間の教育協力からさらに進展すると思われる。

日本人有志の支援によってウランバートルに創立された新モンゴル学園小中高一貫学校。高専、工科大学からなる私立教育機関。学習課程、給食、部活動など日本式教育を取り入れ、卒業生は日本、米国、中国などに数多く留学。JICEが運営する人材育成奨学計画（JDS）にも2016年、モンゴル国政府機関で働く同高校卒業生2名が選ばれた。

学問を習得する目的は 留学生自身にとどまらない

最後に、JICEの留学生として日本に来る方々のために私の個人的な経験による日本の良さについて述べる。まず、モンゴルが好きな日本人が多いことだ。彼らのイメージは「チンギスハーン」、「草原の国」、「自然がきれい」、「モンゴル人は相撲が強い」、「民主化に成功した国」、「新しい国造りに頑張っている若者たちの国」というように、一貫してよいものである。このような好印象は、留学生活を送るうえで追い風になってくれるだろう。日本は自然環境が素晴らしい国であり、四季を楽しむことができる。旅好きな私にとって、留学中には日本の風景を楽しむことができた。留学という長期滞在の間、その国を心から愛し、風土や風習を深く理解することが留学の成功につながると考える。また、日本における各大学の図書館サービスが充実していることも挙げられる。小生は、論文執筆中に国会図書館に足繁く通ったものだ。留学中は、図書館を十二分に活用するように心がけるといい。そもそも、留学のための留学ではなく自分の夢の実現、課題解決、つまり、自分が所属する社会の中で直面する課題に取り組むために留学することが大事である。夢があり、明確な目的をもってJICEの留学生として素晴らしい実績を残してほしい。日本留学で習得した学問は、あなた自身にとどまることなく、世の中をよくするために役立つことを強く望んでいる。

2016年、JICEは「世界につなぐ日本の知と経験～外国に伝えるべき日本の良さ～」と題したP.ナランバヤル氏の講演会を開催。氏は、日本がアジア初の立憲国家となり、戦後の平和教育に取り組んだ意義を強調するとともに、新モンゴル学園の「真心・健康な体・知性」のバランスを促す教育への取り組みを伝え、深い感銘を与えた。

プレブスレン・ナランバヤル／新モンゴル学園小中高一貫学校校長。モンゴル国生まれ。京都大学大学院法学研究科（修士）、モンゴル国立大学国際政治学博士。モンゴルと日本の交流の発展に寄与。2015年在モンゴル日本大使賞を受賞。多くの日本の書籍をモンゴル語に翻訳。

私の日本に関する発見と見解と期待

～JICEその他を通じて得た日本との触れあいの中で～

文＝チャン・ズイ・ドン（Tran Duy Dong）

ベトナム計画投資省経済特区管理局の事務所にて。

美しい国土と人情、教育、経済の底力

私は高校生の頃から海外留学の準備をしていた。海外留学への強い動機は、二人とも海外で博士号を取得した父と兄の支えによるところが大きかった。日本の製品は品質の高さでベトナムでは大変評判だったので、若い頃から私は日本に行きたかった。

自分にあった海外の大学のプログラムを探していた時、日本の博士課程で勉強していた兄から、一言、なぜ日本に留学しないのかと聞かれた。当時、私は、日本の大学の授業は全て日本語で行われていると思っていたので、兄の質問に驚いた。兄から英語によるコースもあることを聞き、ほんの数分間話し合っただけで、私は日本で高等教育を受けようと決心したのだ。

そして、2003年のある日、オフィスで働いていた時、日本政府がJICEを通じて実施しているJDS（人材育成奨学計画）という名の奨学制度により、30人のベトナム人が修士号取得のため日本に派遣されるという全国版の新聞記事を読んだ。その奨学制度の目的、要件、対象とする候補者に関する情報を読んで、すぐに一橋大学アジア公共政策プログラムに応募しようと思った。その後、数カ月間、私は応募書類の作成に明けくれた。数学の試験、作文、面接など何回かの選考プロセスを経て、私は、一橋大学アジア公共政策プログラムへの入学を許可され、2004年から2006年までの2年間、同大学で勉強し、卒業した。日本で知識を得て、日本人と日本の文化に接したことは私にとって素晴らしい経験だった。以下は私の日本に対する印象や見解である。

まず最初に、日本は清潔で美しい国である。上野、代々木、立川など東京及び近郊のたくさんの美しい公園に行ったのを今でも覚えている。これらの場所は、週末に人々や家族がリラックスして楽しめる素敵なところだ。4月には桜が咲き、秋には紅葉があり、さらに美しくなる。大阪、京都、札幌などにもっとたくさんの美しい場所があることも知った。

二つ目は、日本人は、友好的で親切でよく助けてくれる人々だ。外国人が道に迷ったり、困っていたら日本人は喜んで助けてくれる。私の東京での生活が始まったまさに第一日目に道に迷い、通りすがりの女性に助けを求めたところ、その人は、私が行きたい場所にわざわざ連れていってくれた。今でも感謝している。日本に来る外国人は皆、私のような経験をするだろう。

会議でプレゼンテーションするドン氏。

三つ目は、日本の大学は国際的水準の高いレベルの教育を提供してくれる。いくつかの分野では、日本の大学は、世界のトップレベルにある。私が在籍した一橋大学アジア公共政策プログラムなど、日本では多くの大学が英語によるコースを提供している。私が師事したほとんどの教授や講師はアメリカの有名大学卒で、公共政策の分野での実務経験も豊富であった。

四つ目は、日本の経済を研究することによって、開発途上国にとって多くの教訓を学ぶことが出来る。日本は、金融財政政策を柔軟に駆使することにより、「失われた十年」という経済ゼロ成長の時代を乗り越えることができた。もう一つ特記すべきは、日本の企業と日本製品の素晴らしさだ。私は、日本滞在中、新宿のショッピングモールに出かけるのが大好きだった。常に進化する日本の技術を肌で感じることができたからだ。ほとんど毎月のように日本の企業は、テレビ、カメラ、携帯電話などの新しいハイテク製品を発表していた。

JICEのサポートに感謝しつつコンサルティングに生かす

最後に、そして最も感銘を受けたのは、私の留学中、JICEが素晴らしいサポートをしてくれたことだ。出発前ベトナムでJICEが実施した派遣前プログラムでは、規則、文化、食事、そして日本語など日本で必要な情報を提供してくれた。日本到着後は、アパート探し、住民登録、公共交通の使い方に関する情報提供など、JICEはきめ細かいサポートをしてくれた。留学生が困った時は、いつもJICEが傍にいて相談に乗ってくれるのだ。

私は今、ベトナムに帰国し、ベトナムに進出している日本企業へのコンサルティングの仕事をしているので、幸運なことに多くの日本人と接触することができる。JICEの研修、一橋大学での留学など、日本での経験はすべて今でも私のよい思い出だ。また日本に行きたい！

チャン・ズイ・ドン／ベトナム計画投資省経済特区管理局局長。ハノイ市出身。国民経済大学卒業。民間企業を経て計画投資省に入省。JDSにより一橋大学で修士号取得後、ベトナムへの投資案件を管轄する計画投資省の局長に35歳で就任。日本企業の進出や日本政府のODAのカウンターパートとして活躍。

世界一でも学び続ける国、日本

文＝林 慶鴻（リン・ケイコウ／Lin Ching-Hung）

父の思いを背負って日本へ 満員電車の地獄も体験

まだ蒸し暑い日々が続く9月の末頃、仕事中に父から電話がかかってきた。「台北の日本語塾の学費は払った。塾は10月中旬から。すぐ仕事を辞めろ」と、手っ取り早く言うと父はささっと電話を切った。えっ、そんな話は全然聞いていない、もちろん日本語も全然勉強していない、なんでいきなり、一瞬ちょっとぼんやりした。子どもの頃から父が厳しかったせいで親子の間に会話は少なく、すぐに仕事を辞めろと言われてもその場で質問も反論もできないまま、やむを得ず、翌日、辞表を出して台北へ引っ越す支度にかかった。父は高校の時、祖父を急病で亡くし日本の大学への進学ができなくなってしまったと、その後、母から聞いた。

長い間、密かに心の奥に隠した夢を叶えるために長男の私を身代わりで日本へ留学させたがっているとわかった。なんだか重荷を背負った感じがし、単に俺ばかりのことじゃないのか、そりゃ進学しなくちゃと思って、専念して日本語の勉強に取りかかった。

3カ月ほど塾に通い、期末の日本語N2模擬試験にクリアした。翌年の4月1日から東京都の日本語学校に入学した。亜熱帯の台湾から一度も出たことがなかった私にとって東京は寒く、家族が用意してくれたダウンコートを着て、毎日、日本語学校へ通った。

千葉県流山市の親戚からの通学時間は、思いもつかないなんと2時間半以上もかかり、電車の乗り換えは4回だった。電車乗りに素人の私は、隣の人に寄りかからないようにいつもきちんとつり革に掴まっていた。ぎっしりとした満員電車の中で電車進行の揺れリズムで繰り返し押してくる人並みに必死に対抗する。ダウンコートを着ていた私にとって発熱源いっぱいの車内はまさに地獄のようだった。信じられないほど混んでいた常磐線を降りた途端に汗がだらだら、まるで山にでも登ったかのよう、大久保にある日本語学校にやっと辿り着いたときはもうへだへだだった。何年たっても私はあの波には乗れないのに、なんで日本人は男女とも満員電車の中で平気で、かつ違和感なく整然とした行動なのかいまだに不思議に思っている。

大学院生となった最初の週に「これから毎週、論文を読んでゼミの時、報告しろ」と言われた。「日本語の論文ですよね」と不意に尋ねると「違うよ、英語の論文だ」と返事してくれた。えっーまさか、苦手な英語の勉強はとっくに捨てたし、日本に来てN1試験に合格していても日本語を自由自在に操ることは完全に無理と心得ていた。英語を日本語に、これはダブル障害に違いないと、驚異のあまりその日はしんなりとなって食欲不振のまま終えた。やはり気合を入れて勉強しかない、まずは英語の論文を中国語に訳してから、中国語を日本語に訳す苦労をした。最初のゼミ報告はさんざんだったが、一年間よく勉強した挙句、英語の論文をそのまま日本語に訳せるようになった。

日本では日本語の論文を読むのは基本で特に理系は英語の論文も読まなければというのが鉄則かつ常識だと認識した。日本は世界中に数少ない経済大国で技術も管理も優れ、世界一の栄光に浴しているにもかかわらず、絶えずアメリカやヨーロッパなどで発表された論文を読み続けている。常に目を世界に向けて未来へ進むと教えられた。これこそ日本の強さだと理解した。日本一、留年で有名な大学に入学してから2年間、はらはらしながら、留年しないよう勉強した。数理計画法で「トヨタ看板方式の解析」を修士論文のテーマにしたが、ある先生に「これは修士のレベルで書ける論文ではない、難しいからやめたほうがいいよ」と言われるほどピンチもあったが諦めずにやっと解けた。そしてシミュレーションもできた瞬間は、ほっとして3年間溜まったストレスから完全解放された。修論発表が順調に終わってすぐその先生に誘われてご馳走になった。卒業できて背中から重荷が下ろされた感じだった。父との間に親子の会話も多くなった。

台湾の超高齢社会に向けて 日本の取り組みを学ぶ

台湾は日本と同じように既に高齢化社会に入り、2018年からは高齢社会に、2025年からは超高齢社会に入ると予想される。日本政府は高齢者のためにいろいろな政策を推進しているが、台湾は当座の高齢化社会への取り組みさえ欠如している。政府をはじめ、産業界も全然準備ができていない。それで今度の研修テーマはシルバー産業育成の実態と商品開発の実務にした。事前にJICEに打診をしてから一期一会という気持ちでずっとわくわくしていた。何か面白いことが勉強できると心から期待していた。

いよいよ研修本番、初日は高齢者・障がい者への配慮規格の開発に係る経済産業省の施策と日本規格協会の取り組みに関する標準化とアクセシブルデザインとについての解説から始まり、政府側の全般的な政策を教えてくれた。翌日は共用品推進機構が共用品について市場調査と製品開発の実態を紹介してくれた。その後はいくつかの工業技術センターを視察して高齢者・障がい者について高齢者産業育成及び高齢者関連製品開発の実務、高齢者製品開発政策と支援政策、高齢者・障がい者の生活の質を高める支援技術、福祉用具の製品開発の研究を知った。最後は企業側が高齢者向けの新商品開発を案内してくれた。

今度の研修で日本政府、地方公共団体ならびに企業が既にあらゆる面で高齢者関連政策への取り組みを展開していることがわかった。産官民協働で着実に進んでいる。講義は期待通りで、高齢者のための施策と画期的な新商品開発を教わることができた。JICE の皆さんが細心の注意を払って細部まで行き届いた仕事の態度にものすごく感心した。JICE のお陰で最新のシルバー産業と研究進捗状況を案内してもらえ、有意義な研修ができてたいへんお世話になった。

2015年、JICEのコーディネートにより公益財団法人共用品推進機構を視察する（左から2人目が林氏）。同機構は、身体的な特性や障がいに関係なく、多くの人々が利用しやすい製品・施設・サービスを普及・推進するための調査・研究機関。共用品はバリアフリー化を進めるとともに、産業界にとっても市場拡大の効果がある。

林 慶鴻／台湾外交部亜東関係協会経済組組長。東京理科大学大学院理工学研究科経営工学専攻修士課程修了。台湾経済部入処、経済部中小企業処稽核などを経て現職。台湾の私立中原大学商業設計系講師も務める。

日本留学を糧に
母国でのビジネスに邁進

文＝ゾー・ミン・トゥエ（Zaw Min Htwe）

経営管理学を学ぶとともに
日本人の価値観を知る

2017年3月25日に40周年を迎えるJICEを祝福する。JICEはこの40年間、開発途上国の人材育成のための効果的な研修プログラムを提供してきた。40周年記念誌に寄稿する光栄を得たので、日本と日本人に対する私の意見を三つの時間軸で申し上げたい。

一つ目は、私が人材育成奨学計画（JDS）による留学を志願した時のことだ。私は、日本人や日本の文化についてもっと知りたいと思い、JICAがJICEを通じて提供しているJDS留学生を志願するため、ヤンゴンのJDSプロジェクト事務所を訪問した。そして選考に合格し、日本の地を踏んだ時、なぜ日本が世界の経済大国であるかの理由、そして日本とミャンマーの間にいくつかの違いがあることに気づいた。空港では、JICEのスタッフがミャンマーからの留学生を温かく出迎えてくれ、その後の研修プログラムも初めからシステマティックでよく練られていた。東京に滞在して2、3日のうちに物事を効率的、効果的に進める日本人のやり方に感銘を受けた。JICAとJICEは、ミャンマーだけでなく他国からのJDS留学生が修士号取得のためそれぞれの大学に向かう前に、思い出深く、かつ、役に立つオリエンテーションと研修を実施してくれた。

二つ目は、私が国際大学に入学した時だ。同大学の経営管理修士コースで勉強を始めた私は、日本と日本人のユニークなビジネス文化に対する関心が飛躍的に高まった。経営管理学を学ぶ学生として、私は、日本の経営管理手法、経営戦略、金融制度、技術革新、会社社会など多くのことを学んだほか、幸運にも大学の地元の人々の協力で、収穫祭、花見、裸祭、雪まつり、野点など日本の伝統的な文化行事に参加する機会を得た。そして、同級生達の助けで、大阪、神戸、京都、広島、横浜、福岡などの大都市を旅行することもできた。どんな都市に行っても、日本人独特の特徴とその価値観を観察することができた。

日本人の道徳観と規律について今でも忘れられないことがある。それは、2011年3月の東日本大震災・津波の時、略奪事件が1件も発生しなかったことだ。それどころか人々は食料品店の前に整然と列を作り、店員は公平に品物を分配していた。これは驚くべきことで、他の国では絶対あり得ないだろう。

日本初の大学院大学である国際大学で。

JDSは、開発途上国を支援する無償資金協力事業のひとつでJICA、JICEが実施、監理する人材育成奨学計画である。JDSで来日したゾー・ミン・トゥエ氏は勉学の間をぬって日本各地を訪れ、日本の自然と文化にも触れた。

事業を向上させてくれた“カイゼン”
国家形成のため人材育成にも期待

三つ目は、私が留学を終えてミャンマーに帰国してからのことだ。私は、日本で学んだ専門知識を、実際にビジネスの世界に活かしたいという気持ちがとめどもなく湧いてきたのだ。

そこで、私は、2012年にミャンマーで操業する日本企業を顧客として、輸送業とICTとビジネスのコンサルティング事務所を開業した。この当時、日本政府は2011年のミャンマーの民主主義政策を支援するため援助を増額し、以降、日本政府の援助プロジェクトや民間企業の投資案件が増加した。日本は他国を凌駕し、ミャンマーの最大支援国となった。その結果、私が事業を始めて1年もすると、多くの日本の顧客を得て、彼らとよい関係を築くことができた。私は、毎日のように日本の顧客と良好なコミュニケーションを持ち続けた結果、日本の大企業からの仕事を独占することができたのだ。日本で学んだ“カイゼン”の知識が私の事業の質の向上に役立った。また、コンサルタントとして、帰国したJDS留学生の国の開発への貢献に関する評価調査をJICE本部の方と一緒に実施したこともよい経験になった。この調査を通じて、私は、日本がミャンマーの人材育成のために大きな貢献をしていることを知った。

このようにいろいろな方法によって我が国を支援してくれる国は日本だけだ。しかも崇高な道徳観を持つ日本人の態度と行動は素晴らしい。JDS留学生として私に日本での2年間の勉学の機会を与えてくれた日本政府と日本の国民の皆様に心から感謝する。日本で得た専門知識と人的ネットワークのおかげで今の私があるのだ。

最後に日本政府が今後ともJICEを通じて、JDSだけでなく、その他JICEが実施する近代的で発展した国家形成に必要な人材育成プログラムをよりたくさんミャンマーに提供してくれることを期待して結びの言葉としたい。

JICE40周年を心から祝福するとともに、今後もJICEがますます発展することを祈念する。

ゾー・ミン・トゥエ／EMJ Global Co.,LtdのCEO/Managing Director。ミャンマー連邦共和国出身。ヤンゴンコンピュータ大学卒業。国際大学（IUJ）でのMBA取得を契機に会社設立。論文掲載に「Opportunities and Challenges for a Foreign Invested Company at Yatanarpon Cyber City, Myanmar」など。

IIEとJICEのパートナーシップ

文＝ペギー・ブルメンタール（Peggy Blumenthal）

1世紀続くIIEの信念は「相互理解こそ緊張を和らげる」

JICEは2017年に40周年を迎え、Institute of International Education（IIE）は2019年に100周年を迎えるが、両組織に共通する使命とこれまでの経験について意見を述べたい。IIEは、第一次世界大戦後、1人のコロンビア大学教授と2人のノーベル平和賞受賞者（1人は元・国務長官、もう1人はコロンビア大学学長）によって設立された。彼らは、国家間の緊張を和らげるための最もよい方法は、学術交流と海外留学によって人々の外国に対する理解を深めることだと共に考えた。この信念は、今日のIIEの理事会や職員にも引き継がれ、IIE理事長は、IIEが100周年を迎える2019年、すなわち2010年代の終わりまでに、海外の多様な国に留学するアメリカ人学生の数を倍増することを目標とする「海外留学世代創出計画」を打ち上げた。

筆者が2013年に初めてJICEの本部を訪問した時、JICEの職員がIIEの職員と同じ信念を共有していることと、JICEの仕事の中に国際相互理解の促進という目的が根付いていることを知って深く感動した。活動的で先見の明を持った理事長の下で、JICEは、これまで活動領域を広げ、支持者を増やし、そして斬新なアプローチや世界のよい事例を取り入れることによって常にサービスの質の向上に努めてきた。IIEは光栄にもこれまで3人のJICE職員を短期業務出向者として受け入れたほか、3人のJICE職員に対する集中英語研修をアレンジした。彼らがニューヨークの我々の事務所で観察したことや得た知識に関する報告書を読んでわかったのは、このような職員の短期交流プログラムは、派遣する側、受け入れる側の双方が触発され活気づくという素晴らしい価値があるということだ。

IIEは米国の国際的な教育・研修機関で、世界最大規模の豊富な経験・情報を蓄積している。2014年度よりJICEはIIEに職員を派遣し、研修（インターンシップ）を行ってきた。IIEを訪問したJICE一行とブルメンタール氏（後列左端）。

IIE本部で打ち合わせを行うブルメンタール氏（右）とJICE山野幸子理事長。JICEとIIEは2014年の了解覚書締結後、協力関係を構築。IIEおよび米国の主要大学との共同企画により、新しいプログラムも始動させている。

IIEを訪問したJICEのミッション。IIEの本部は米国ニューヨーク州にあり、ワシントンD.C.に事務所を設けている。

JICEの一行とカフェで語り合う。

パートナーであるJICEの40周年を祝福

10年前に共同で運営した「リビア石油省従業員留学スカラシップ」に始まり、これまでIIEとJICEはパートナーとして共にその価値を認め合ってきた。我々はさらにこのようなパートナーシップが将来にわたって続くことを期待しつつ、JICE40周年を心から祝福したい。

教育・文化交流を通じて国際相互理解を深めるという我々の共通の使命は、IIEが設立された100年前同様に今もなお重要である。日本および世界の同種の組織が共に手を携え合って、次世代を担う指導者や市民達に国際的な学習の機会を提供することにより、全ての人々が能力を出し切って世界の問題解決に貢献し、国内外において、より公正で豊かな社会を作ることのできる平和な世界を築いていきたい。

ペギー・ブルメンタール／Institute of International Education（IIE）、Senior Counselor to the President。30年にわたりIIEに勤務し、2011年より現職。著書に「International Students and Global Mobility in Higher Education: National Trends and New Directions」（共著）など。

社会資源としての作家と文学
～小泉八雲の「オープン・マインド」を生かす実践から～

文＝小泉 凡（Bon Koizumi）

世界市民・八雲が残した 21世紀を開く思考

2001年9月、セントラル・ワシントン大学の交換教員として家族ともども渡米した。荷解きをする間もなく同時多発テロ事件に見舞われた。2カ月ほどして国民の動揺も少し落ち着き、こちらも生活に馴染んできて、当時10歳だった息子が通う公立の小学校によく顔を出すようになった。そこで垣間見た総合教育、ほめる教育、自立を促す教育に大きなカルチャーショックを受けた。息子のクラスではその学期は「サーモン（鮭）」が学びのテーマとなった。鮭が生息するヤキマ川やコロンビア川の訪問と鮭釣り体験、養魚場見学、鮭の卵の孵化と観察、バーベキューをして味わう、魚拓をとりショート・ポエムを作る。この一連の「鮭体験」は、生物と地理と社会と美術と国語を綜合した学びになる。一つの事物を多面的に見ることの面白さや素晴らしさを体感できる。

そして多くの親や教師は、“Selfesteem” つまり「自分が存在することのすばらしさ」を教えることを最重視する。学校では各学期の終わりにクラスメイトが友達の「いいとこ探し」をして、その一覧表が成績とともに配布される。プレゼンテーションは幼稚園の段階から楽しく実践する。いずれも、中等教育以降の “independent living”（自立をめざす学び）に生かされる。かつて曾祖父の小泉八雲（ヘルン、ラフカディオ・ハーン）が明治日本の教育界へ表明した懸念が思い出された。日本の教育では、「記憶力偏重で想像力を育んでいない、親が学校に甘え過ぎ、詰め込み式の勉強をさせることが気になる」。「与えられる教育」と甘えの構造の連鎖への不安を抱いていたようだ。

こんな八雲の五感力と本質をみるまなざしが、いま再評価され、「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン・プロジェクト」として世界を巡りつつある。ギリシャに生まれ、アイルランドで育ち、アメリカ・カリブ海経由の地球半周を超える片道切符の人生旅行で日本へ辿り着いた八雲。偏屈で短気なところもあったが、帰属の曖昧さゆえか世界市民的感覚を持ち、西洋中心主義でも人間中心主義でもない視野で文化の本質を観察した。

「八雲の精神性の根幹は『オープン・マインド』で、これこそ21世紀に必要な思考」だと言ったのは、長く八雲を愛読してきたギリシャの友人のタキス・エフスタシウ氏だ。彼の提案により、2009年にギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで始まったユニークな現代アート展 “The Open Mind of Lafcadio Hearn” のオープニングには、文学やアート、日本に関心のある500名もの人が集まり、ギリシャで小泉八雲や日本文化が再評価される契機となった。従来、文学作品は愛読者の鑑賞の対象や研究者の研究対象として存在した。また、作家の顕彰という動きも古くからあり、八雲については1世紀前に松江で八雲会が発足している。しかし、この美術展では、研究でも鑑賞でも顕彰でもない、文化資源として作家の事績や思考を現代社会に生かすという、新しい文化創造活動の芽生えを実感することになった。

松江城天守閣で開かれたオープン・マインド・プロジェクト（左端が小泉氏）。八雲の愛読者には、第二次世界大戦後、マッカーサー元帥の副官として来日し、天皇制維持に重要な役割を果たした将校ボナー・フェラーズもいる。八雲の影響力の大きさがうかがえる。

その後、オープン・マインド・プロジェクトは継続的に活動し、2010年には松江城の天守閣で、2011年にはニューヨークの日本クラブで、2012年にはニューオーリンズのテュレーン大学で現代アート展を開催した。さらに2014年には八雲の生誕地ギリシャのレフカダで、世界4カ国、9名のパネリストによる国際シンポジウム「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン　―西洋から東洋へ―」を開催し、「オープン・マインド」の意義を検証した。そこで導かれた方向性は「自分がこうだと思っていることが絶対ではなく、それが最終の結論でもなく、そこから次に新しい道が開かれていく。子ども達には常にそういう新しい道を開いていくという場を提供しなければならない」というものだった。

出雲大社で古代ギリシャを想える 「オープン・マインド」の力

2015年にはアイルランド南部ウォーターフォード州のトラモアに、八雲の精神性を9つの庭で表現する「小泉八雲庭園（Lafcadio Hearn Gardens）」がオープンした。トラモアはハーンが子ども時代の夏を過ごしたケルト海に臨む保養地で、海水浴を楽しみ、乳母キャサリンの語る妖精譚や怪談に胸をときめかせた場所だ。世界によくある日本風庭園ではなく、アイルランド人の自由な想像力が作り上げた八雲の精神を感じる庭である。ダブリン・リトル・ミュージアムでは、はじめて八雲の「里帰り展」も実現し、松江出身の俳優・佐野史郎さんとギタリスト・山本恭司さんのライフワークである「小泉八雲朗読パフォーマンス」も3都市で実現した。

かつて八雲は明治の日本で、出雲神話を読み、出雲大社の巫女舞をみて古代ギリシャを懐かしみ、輪廻転生の思想に触れてケルトの民俗信仰ドルイドを想起した。つまり日本にヨーロッパ文化の古層を見出したわけだ。そんなオープン・マインドで明治日本の本質に迫ろうとした八雲の精神が、世界のゆかりの地から発信されることに喜びを覚える。作家やその事績は、文化資源、地域資源として社会に生かされる時代が来ていることを痛切に感じている。

八雲が少年時代に夏を過ごしたアイルランドのトラモアにできた「小泉八雲庭園」。八雲の精神性がアイルランド人の発想で具現化された。

松江出身で八雲をリスペクトする俳優・佐野史郎さんとギタリスト・山本恭司さんによる「小泉八雲朗読パフォーマンス」（ギリシャ公演）。毎年、新作が発表され、2017年は10周年を迎える。

小泉 凡／島根県立大学短期大学部教授。八雲のひ孫で小泉八雲記念館館長、焼津小泉八雲記念館名誉館長、八雲会名誉顧問。成城大学大学院文学研究科日本常民文科専攻博士課程前期修了。著書に『怪談四代記 八雲のいたずら』など。JICEは松江市と八雲会による小泉八雲を讃える青少年のスピーチコンテストを後援している。

2015年 訪日医療研修の印象

文＝周 暁俊（シュウ・ギョウシュン／Xiaojun Zhou,Dr.）

消化器内視鏡診断、ロボット支援手術、腹腔鏡手術の最新動向を知る

私にとっての日本とは、よく知っているようで、よく知らない国でした。よく知っている面としては、唐の時代から中国と日本の交流が始まっているところです。しかし、私たちが知っている日本は、いずれも文学や映像作品により「知らされた」ものなのです。本当の日本はどのような様子なのか。日本の人々はどのように生活しているのだろうか。誰もが「日本の医療は発展している」と言うが、実際の日本の医療はどのような状況なのだろうか。一人の外科医として、これらについて何も知りませんでした。

私たち一行10名は、幸いにも2015年9月から11月の第4回「江蘇省衛生和計画生育委員会ー日本国際協力センター医療プロジェクト」のメンバーとして東京を訪れ、3カ月にわたる医療研修生活を始めることができたのです。JICEは、私たちの今回の研修に際しきめ細かく手配・準備し、日本自体、そして日本の人々や医療に対する理解を深めさせてくれました。

東京での1週目には、JICEがいくつかの公式行事を手配してくれ、日本の医療に対する私たちの第一印象は、先進的、厳格、規範的といったものでした。

私たち一行10名は、各自の専門に応じてそれぞれの病院や診療科へ配置され、研修・学習生活が始まりました。私とその他5名の医師は、東京都内でも有数の歴史ある私立大学の附属病院である順天堂大学医学部附属順天堂医院で研修することになりました。

180年以上の歴史を有する順天堂大学の小川秀興学長を表敬訪問。同大学附属順天堂医院での研修のほか、放射線医学総合研究所、東京女子医科大学先端生命医科学研究所、医療機器メーカーなども視察。

私は、1カ月目は消化器内視鏡室で研修を受けました。日本の消化器内視鏡による診断・治療技術は世界最先端であり、日本の診療ガイドラインが世界でも数多く用いられています。今回の得難い研修の機会に、日本の内視鏡治療に従事する医師らの近くで交流しながら研修したため、消化器腫瘍の早期診断や内視鏡治療の最新動向を深く理解でき、大きな収穫が得られました。そして、内視鏡による診断や治療に対する認識を新たにしました。

順天堂大学附属順天堂医院で受けたシミュレータによる結腸内視鏡検査の操作訓練。ドイツ、米国においても豊富な研修経験を有する周氏だが、日本での研修も実践的で満足できるものだった。

各症例の手術操作をつぶさに視察。国立がんセンターでのロボット支援手術見学、ロボット支援手術トレーニングセンターでの研修なども行った。

続く2カ月目には、中国の結腸・直腸外科に当たる下部消化管外科へ移行しました。坂本一博教授が親切に私を受け入れて下さり、一人の若手医師から仕事の流れや環境を詳しく説明するよう、取り計らってくれました。温和な人柄で心遣いも細やかな坂本一博教授は、自ら順天堂浦安病院の福永正氣教授や埼玉県立がんセンターの江原一尚先生へ連絡し、私を紹介して下さいました。このお二人は日本で非常に有名な胃癌の腹腔鏡手術の外科の専門家です。

日本の医師は、各症例の手術操作を極めてまじめに行い、規範に厳格に則り、手順通りに進めます。医師によって技術や速さの違いはありますが、手術のプロセスを一つ一つ丁寧に仕上げていくのです。当初、私は、そうしたやり方に対し、少し面倒だなと思いました。しかし、よく観察していくと、そうした規範的な操作フローや手術の質的コントロールがあってこそ、患者の最も安全な治療が確保され、術後の合併症も低減されるということが分かったのです。また、規範を厳格に守る操作は、一人一人の若手医師を成長させるのに非常に役立ちます。

清水寺の森貫主はじめ、日本文化の真髄に触れられた交流

今回の東京行きは、研修だけでなく、日本の文化を感じる旅にもなりました。JICEの皆様の心遣いに感謝いたします。そのおかげで、美しい北海道へ行き、北国の雄大な風景を愛でることができました。そして、古都京都で清水寺の森清範貫主を訪ね、日本の宗教、歴史、文化などへの理解を深めました。鎌倉では鶴岡八幡宮を参拝し、日本人の心の中で神社が大きな存在を占めることを感じました。東名厚木病院の見学では、日本の老人福祉制度に触れ、深く啓発されました。また、高田馬場では卓球大会にも参加しました。最も印象深かったのは、日本の一般家庭に招かれたことです。日本の一般の人と会って話し、互いの文化、考え方、習慣などを理解し合えたので、とても楽しいひと時でした。

京都・清水寺の森貫主を訪問。森貫主はその1年の世相を表す「今年の漢字」の揮毫でも知られる。

私たち一行10名の医師は、いずれも江蘇省の各大病院の精鋭として選抜されました。全く知らない者同士だった私たちは、今回の中日医学交流プロジェクトへ参加したことにより、家族のように親しくなれたのです。互いに研修のことを話し、協力し合いながら生活して、旅行、食事、買い物などを楽しく共にしました。あれほど素晴らしい東京での日々は、皆の努力と協力の賜物であり、この楽しい思い出を皆が大切にしていくことでしょう。そのメンバーは王芳軍、周中、徐偉、潘峰、張衛国、閔寒、張明、陳軍紅、陳暁琳です。

私たちは医学の知識を学ぶために日本に行っただけでなく、中国人民の友人としての情愛も携えて行きました。友情こそ、中日両国が共に発展を図るための固い絆です。友人である日本の皆様にも、機会があれば中国・江蘇省を訪問し、私たちの町へ来ていただきたいと願っています。心から温かく歓迎させていただきます。

周 暁俊／蘇州大学附属第一医院胃腸外科副主任。蘇州医学院臨床医学部卒業。医学博士。肝臓腫瘍外科および肝臓移植研究を経て胃・結腸・直腸癌の腹腔鏡手術をはじめ腹腔鏡下での減量外科手術、鼠径ヘルニア治療、腹壁ヘルニア修復術で高い評価を得ている。米国消化器内視鏡外科学会、中華医学会外科学分会、中華医師学会外科学分会会員。

変わる世界、つながる人々、教育による パブリック・ディプロマシーの新時代を考える

文＝アルモーメン・アブドーラ（El-Moamen Abdalla,Ph.D.）

日本で学ぶことの付加価値は何か

エジプトで私の住んでいた街にサンドイッチ屋さんがあった。店自体が屋台に近い作りでカウンターの中にキッチンがあり、店主がハンバーガーを焼いてくれる。味は普通だが、なぜか私はほぼ毎日通い詰めていた。私が好きだったのは店主の面白い話、おまけで付けてくれるうまい漬け物だった。その店の魅力について「本質価値」と「付加価値」で評価するとしたら、本質価値の部分では他の店に負けているかもしれない。だが、付加価値の部分ではきっとどこにも負けていない。もしかすると店主のおしゃべりと漬け物の戦いでは他を圧倒するかもしれない。

本質価値と付加価値という問題はかなり複雑で、一筋縄ではいかない。教育もそうである。科学技術の頂点を極めた日本は、身につける技術やノウハウといった教育の本質価値の部分では世界の誰にも負けない存在である。しかし付加価値ではどうだろうか。そしてそれは世界に伝わっているのだろうか。

「日本で学ぶことの付加価値って何？」ー外国機関や外国人にこう聞かれたら、日本の教育関係者は何と答えるのだろうか。おそらく多くの方が分かっていないことのひとつだと思う。そもそも付加価値とは、「何らかのモノを使って新しいモノを生み出すと、元々のモノより高価値なモノとなる」ことを意味する。例えば、日本の科学技術はたいへん優れていると世界的にも定評があるが、科学技術が優れている国は決して日本だけではない。他の国とは違う、日本ならではの「何か」があるはずだ。もし私が「機械工学」を日本で学ぶことになったとして、自分の国や他の国で学ぶのとどう違うのだろうかと考えたとき、日本ならではの「何か」が見えてくるはずである。

「日本に留学して良かったと思うか。また、その理由について教えてください」。留学生の友人や知り合いにこの質問をぶつけてみた。ありきたりの質問だが、その人が何を学び、また何を望んでいないのかがよく分かる。筆者が得た留学生の声をいくつか紹介しよう。

- 「サウジアラビアにいたとき、自分の発言や行動を他人がどう思うか、そんなに気にしていなかった。日本人はそれを一番に考えて行動していることを知り、世界を他人の目からも見るようになった。結果、自分をコントロールすることを学んだ」（サウジアラビア人留学生・理工学部在学中）
- 「日本人は、結果より過程を重視している国民である。『頑張れ、頑張れ』といつも言っているのもその精神性の現れだと思う。日本のモノづくりにおいても、結果より過程が一番大事な要素だと学んだ」（UAE出身留学生・工学部在学中）
- 「論理的な考えや理屈だけで相手を説得しようとする欧米型コミュニケーションとは違うタイプのコミュニケーションが日本にはある。留学期間、日本人との議論や関わり合いを通して学び、その結果、自分の考えを通すことより相手との気持ちのやりとりを重視するコミュニケーションスタイルが身についた」（エジプト人留学生・人文科学系大学院生）

留学生の声はさまざまなのだが、彼らの見方で明らかなのは、科学技術などといった日本教育の本質価値以上に、和、礼、信、忠、美など日本人ならではの質樸な風習やその精神性という付加価値的な部分に対する関心の方が大きいようである。

日本に来てから今年で21年目になる。「早いもので」と言いたいところだが、早く感じるほどの月日ではなく、自分にとってまさしく波瀾万丈の21年だった。想像を遥かに超える状況に翻弄された最初の10年は苦労しながらも尊いものだった。その後もさまざまな巡り合わせがあり、私はここにいる。そんな私に「日本の魅力は何か」を言わせると、一言で「人のために努力し、生きる考え」だ。欧米では「個人の幸せや利益」を一番に考え、「他人や周りの幸せや利益」は二の次だとするのだが、この国では全くそうでないことに驚いたのである。駅に行けばいつでも駅員さんが対応してくれるし、病院や学校、会社など社会のあらゆる機関や組織が人のためにある。「他人や周りを思いやり幸せにする」というような高貴な考えのある社会システムとしては他国では得られない価値である。

ここ数年、日本とアラブ諸国の経済または科学技術の交流が徐々に深まるにつれて、日本人とアラブ人の接触する機会が増えている。ただ、言語と文化の壁により、互いの社会の情報を完全に理解できず受け入れられないことがある。互いの偏見や 誤解、ステレオタイプといった障壁によって対立が蔓延する国際社会を前に、こうした文脈を背景に注目を集めているのが「文化外交」とも訳されるパブリック・ディプロマシーというものである。パブリック・ディプロマシーの活動分野もさまざまだが、その中で特に注目に値するのは留学や研修など「知」によるパブリック・ディプロマシーというものだ。これは国と国や、民族と民族の間の文化交流や知識移転の橋であり、人類の進歩の敷石の階段と言える。

こうしたパブリック・ディプロマシーの推進にとっては、留学や研修などによる文化交流や知識移転のエキスパートである JICE のような組織の存在が大きい。その存在の重要性が実感できたのは、数年前のサウジアラビア政府派遣事業の時だった。当時は在京サウジアラビア王国大使館・文化部でアカデミックスーパーバイザという公職的な立場にあった私だが、JICE の力を借りながら、サウジアラビア政府が展開する人材育成や研究協力などの分野を中心に日本とサウジアラビアの間の多様な協力チャンネルを構築するためのさまざまなプロジェクトの推進に奔走していた。サウジ政府派遣による奨学生の受け入れ先の確保やその生活サポート、政府機関や大学による研修生の受け入れ、サウジ奨学生のための大学説明会や就職フェアへのサポートなど、教育の多種多様な案件へのJICEの貢献が確かなものだった。もちろん、JICEの貢献とその範囲はサウジアラビアの高等教育だけにとどまらず、UAE やリビアなど多くの中東やアラブ地域の人材育成や高等教育へのサポートにまで行き渡っていた。

古くて新しい手段のパブリック・ディプロマシーの可能性に期待しながら、日本とアラブの関係の百年の大計を作るために、言語によるボーダーレスの新時代の実現をめざすことが重要である。現在、アラブやイスラームに対する誤解や偏見が拡大し、また逆にアラブ人の日本の中東政策に対する厳しい見方も進んでいる。日本とアラブ世界が迎えた21世紀とは、単なる20世紀の延長ではない。過去・現在・未来を同時に生きなければならない、「複合の世紀」なのだ。文化や教育によるパブリック・ディプロマシーのその効果的役割に大きく期待したい。

2015年2月、仏週刊誌襲撃事件について日本記者クラブセミナーで講演。イスラーム教徒はイスラームの理解において一枚岩ではないことを強調した。

2016年、アラブ首長国連邦（UAE）アブダビ首長国で開催されたUAE最大級の進学・就職フェアNajah Exhibitionで日本の高等教育をPR。JICEは、アブダビ教育評議会との協力によって日本アブダビ教育・交流センターを設立し、アラブ世界の人材育成に取り組んでいる。

アルモーメン・アブドーラ／東海大学国際教育センター准教授。エジプト・カイロ生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科で日本語日本文学博士号を取得。元NHKテレビ・アラビア語講座講師。著書に『地図が読めないアラブ人、道を聞けない日本人』など。

アイルランドにおける日本理解を育む「エクスペリエンス・ジャパン」

文＝ヒューゴ・オドネル（Hugo O'Donnell）

アジア初の外交関係樹立国、日本その伝統文化からコスプレまで

アイルランドは、ヨーロッパ大陸の北西に位置する北大西洋の島国で、国民の大部分は英語を話します。アイルランド共和国の人口は約480万人で、1921年にイギリスから完全に独立を果たしました。アイルランドの国土面積はEUの中では、16番目になります。

国際連合に加入したアイルランドは、1957年に日本と外交関係を結びました。アジア諸国の中で、アイルランドが外交関係を結んだ最初の国が日本です。2017年には日本とアイルランドの外交関係樹立60周年を迎えます。

アイルランドの国民的祝日は「セント・パトリックス・デー」で、毎年3月17日にアイルランドはもちろん、世界中で祝われています。東京で開催されるセント・パトリックス・デーのパレードはアジアでも最も規模が大きく歴史のあるもので、毎年3万人ほどの参加者と観衆が集うといわれています。

外国との異文化理解と体験を促進するのに最も適切な手段は、文化フェスティバルです。「エクスペリエンス・ジャパン」は2010年に、日本とアイルランドの文化交流や両国の文化伝統を、ダブリンをはじめアイルランド全土に広めることを目的として、さまざまなアイルランドの団体やコミュニティー活動に携わる人々が集い、組織されました。これにより、日本とアイルランドが長年培ってきた友好関係がひとつの形になってきました。「エクスペリエンス・ジャパン」フェスティバルは毎年4月に開催され、年々イベントの数が増えています。

毎年「エクスペリエンス・ジャパン」フェスティバルのハイライトとなるのが、フェニックス・パークにある壮麗なファームリー・ハウスと庭園での日本の伝統行事、お花見です。ここは桜を見て、春の行楽気分に浸るには格好の場所です。これまでの来場者は12万5千人を数えます。大勢の人がさまざまな舞台パフォーマンス、演武、和太鼓、折り紙と工作、そしてコスプレ等のイベントを観にやって来ます。アイルランドの国立迎賓館であるファームリーは、2005年の5月に天皇皇后両陛下が四日間ご滞在されたこともあり、アイルランドの日本人コミュニティにとって特別の場所となっています。

異文化理解を通じて多様な連携に繋がるモデルを確立

他にも多くのイベントがあります。「エクスペリエンス・ジャパン」フェスティバルと連動して、在アイルランド日本国大使館企画の日本映画祭（ジャパン・フィルム・フェスティバル）が開催されます。2週間にわたり日本映画祭はコーク、ダブリン、ゴールウェイ、リムリック、ウォーターフォードなどアイルランド各地を巡回します。

日本・アイルランド間のビジネス連携を促進するべく、「エクスペリエンス・ジャパン」はアイルランド輸出業者組合が母体となる国立アジア貿易フォーラムと連携し「日本におけるビジネスの展開」というテーマのもと報告会を行いました。

また、ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンは2014年より、JICE職員を英語研修コースで受け入れています。

「エクスペリエンス・ジャパン」の初期の活動中、JICEの協力を得たことで、アイルランドとアイルランド文化に興味を持つ日本人や日本の機関と円滑に連携することができました。「エクスペリエンス・ジャパン」フェスティバルにはJICEのスタッフの方々にも参加してもらい、ご自身のお仕事の内容の紹介や、日本・アイルランド交流がテーマの座談会を開いていただく機会もありました。JICEの方々が関心を寄せる異文化理解の促進と学習機会の拡大は我々のフェスティバルの理念と完全に一致するものです。

「エクスペリエンス・ジャパン」は日本と日本文化に興味を持ち、よりその理解を深めたいと思う人々に交流の場を提供することを目的としています。なかんずく、この行事がアイルランド人と日本人の間に生まれた子どもたちに自分たちの文化と伝統をよりよく知ってもらうきっかけとなれば本望です。フェスティバルの規模は近年大いに拡大し、現地の人々の日本文化に対する興味のほどを物語っています。今後はこのモデルをさらに拡充させ、教育、観光業、あらゆる形態のビジネス、芸術、文学、メディアなど、さまざまな領域で活躍する個人ないし団体とより多く連携していきたいと考えています。また、将来はダブリンだけではなく、アイルランド全土で活動する機会を増やしていきたいと思っています。我々は新規のイベントやアイデアに関する提案を常に歓迎しています。

我々が手がける催しはどれも家族向けで、そのほとんどが無料です。アイルランドの大学で学んでいる日本人の学生・短期留学生のボランティアの協力を得て、共に企画を作り上げていくのが我々のイベントの大きな特徴です。「エクスペリエンス・ジャパン」がこうして成功したのも、一つには出演者やボランティアの学生の活躍があったからです。出演者、協賛者、ボランティアを合わせると、毎年350人以上の人々が「エクスペリエンス・ジャパン」フェスティバルに携わっています。

近年では我々のジャパン・フェスティバルに似た催しが世界各地で開催されているようです。近所にそのようなイベントがあったら、皆さんも参加してみてはいかがでしょうか？ 自分の地域に住民として貢献するのはとてもいいものです。世界が広がりますし、新しい発見もあります。「エクスペリエンス・ジャパン」の成功を支えてくださった在アイルランド日本国大使館、日本からサポートしてくださるJICE、そして毎年援助を惜しまない数多くのボランティアの方々に心より感謝のほど、申し上げます。

エクスペリエンス・ジャパン・フェスティバルは、ダブリン市議会、ファームリー公共事業局、在アイルランド日本商業懇話会、国立アイルランド大学ダブリン校、愛日協会、在アイルランド日本国大使館と、官民にまたがる多くの団体の援助を受けて行われ、アイルランドの人々に愛されるイベントに成長した（左写真・右端がヒューゴ氏）。

ヒューゴ・オドネル／ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン（University College Dublin, UCD）、Applied Language Centre（ALC）、Senior Administrator。アイルランド国で開催されるイベント Experience Japan 実行委員長。

互いにかけがえのない“友”となるために

文＝湊 芳郎（Yoshiro Minato）

個人の美点、組織の力
等身大の日本理解を

『日本の友をつくる』。これは、1988年から約6年にわたりJICA総裁を務めた柳谷謙介氏が退任後に書かれた本のタイトルです。極めてシンプルな表現の中に、もともと外交官であった柳谷氏の途上国援助に対する深い思いが込められています。

私は、かつて約30年間 JICA に奉職しました。技術研修員や留学生を日本に受け入れる事業にも携わり、研修監理員の配置や研修コースの日々の運営など実際の現場では JICE と二人三脚でより効果的な事業の実施に努めました。

そのとき得た実感は、学びの成果を上げるのも、日本に好感を持つも持たないも、大方は教える側やその周囲にいる「人」次第だということ。その象徴的な存在がJICEの研修監理員の方々で、JICA本部で研修事業担当をしていた頃も、帰国前の研修員に「（JICA ではなく）JICEの監理員の方々には本当にお世話になりました」と挨拶され、複雑な思いをしたこともたびたびありました。しかし、もともとオールジャパンでやっている事業ですから、喜んで帰国してもらえれば上々。JICEには、今後とも事業現場の最前線に、その人となりも含め最適の人材を確保してもらうようお願いするとともに、来日した方々にも積極的に人間関係を築かれるようアドバイスしたいと思います。

日本は先の大戦後、世界でも最貧国に近いレベルからスタートして、国際社会の支援を得ながら急速な経済発展を遂げ世界有数の経済大国になりました。この間、環境公害など経済発展に伴って生じた負の側面も、多くの犠牲を払った末になんとか克服するに至りました。これらの経験のキーポイントを伝えることは、開発途上にある多くの国の方々にとって大いに参考になるものと思います。

同時に、バブル崩壊後、長年にわたるデフレ状態に苦しみ、何とかこの状況を脱すべく官民挙げて暗中模索していること、押し寄せる少子高齢化の波に大きな不安を感じつつ克服策に苦慮していること等、経済大国であることに変わりはないものの、国民生活を守り世界に貢献していくために種々悪戦苦闘しているのも事実です。

個人レベルでは、国内外の多くの人たちが日本人の美点として、礼儀正しさ、親切、モラルの高さ等を挙げます。長年にわたり世界を見てきた私の実感では、どこにでもいる一般的な労働者層の勤勉さが日本を根っこのところで支えているように思えてなりません。

ごく最近の例では、リオデジャネイロ・オリンピックでの陸上400mリレーで見せた日本のチーム力の凄さが印象的でした。100m9秒台の選手が一人もいない日本チームが、アメリカチームを凌いで銀メダルを取れたのは、紛れもなくチーム力の勝利でした。あのときの奇跡のパスワークは、昔ながらの職人気質にも通じるような気がします。

他方、この種の集合体あるいは組織としての強さは、ともするとある種の同調圧力と表裏一体だったり、突出した個人を抑制しがちな面もあるように思います。近年の俗に言うKY（空気を読め）という風潮も伝統的な調和を重んじる気持ちが根底にあるのでしょうけれど、行き過ぎると自由闊達な議論を封じ込める恐れもあります。

要は、できるだけリアルな等身大の日本を知っていただき、その上で良い点を吸収してもらいたいということです。

メリットは双方に
日本人に気軽に話しかけてほしい

研修員や留学生、あるいは交流で来日した方々は、受け入れる日本側にとっても有意義な存在です。ともするとマンネリ化しがちな日常生活に良い意味での刺激を与え、地域の活性化・国際化に資するとともに自分たちを振り返る良い機会ともなります。

その意味でも、来日する皆さんにはせっかくの機会を、宿舎と講義や演習の場の往復に終わらせないでほしいと切に願っています。慌ただしいスケジュールの中では難しいかもしれませんが、ぜひ、町なかに出て、「普通の人々」と接してほしい。日本人は一般的にシャイで自分から声をかけることは少ないと思いますが、皆さんが話しかければきっと親切な対応が返ってくるはずです。

そのためにも、特に地方では、初歩レベルで良いので日常会話で使う日本語を身に着けてもらいたいなと思っています。経費やスケジュールの関係で難しい面もあろうかとは思いますが、関係機関の方々や来日する皆さんに一考願えれば幸いです。

「人造り　国造り　心のふれあい」。ひと昔前のJICAのキャッチフレーズです。今ではほとんど耳にすることもなくなりましたが、私は国際協力・交流に関わる国内外のすべての人々が時代を超えて共有できる常緑樹のような言葉だと思います。「心のふれあい」は双方向でなければ実現しません。来日の折には、小さな勇気をふるって、ぜひ、周りの人に話しかけてみてください。

湊 芳郎／元独立行政法人国際協力機構（JICA）国内事業部長。早稲田大学政経学部卒業後、読売新聞社を経て国際協力事業団（現・JICA）に入団。マレーシア事務所次長、人事課長、秘書室長などを歴任。JICEの元監事。

日本の秘密？

文＝キムラ・カルロス・アルベルト・ヒロシ（KIMURA Carlos Alberto Hiroshi）

がむしゃらに働き、データを蓄積する

「日本の秘密は何なのか」と、先日、いきなり研修員に聞かれた。自分自身、来日当初、同じ質問を多くの人にした「懐かしい」質問であった。26年前、相手にしてくれた人はただ驚いた表情で逆に「何についての秘密なの？」と聞き返してきた。

当時の私は「日本はどのように短期間に敗戦国から復旧・復興・急成長し、80年代に経済大国になれたのか」や「日本はどのように伝統文化と最先端技術を調和して発展しているのか」等々、漠然とした質問をしていたと思う。具体的に「何」について知りたいか、はっきり分かっていなかったのではないかと思う。

長年、日本で生活しJICEで日本国政府のODA事業に関わって、「今」の自分は当時の「疑問」の答えとなる糸口が少しは見えてきたような気がする。

海外調査同行を通して内戦状態から和平交渉プロセス、復旧・復興事業を知り、相手国政府の立場や考え方だけではなく一般市民の「感情」にも触れることができた。その一方、研修員受入事業を通して相手国政府職員や日本側研修受入機関の関係者と話をして「国造り」についていろいろ考えさせられ、以前「何」について知りたかったのか、少し分かってきた気がする。

「日本人はどのように自国を発展させてきたか」という疑問は、研修事業でさまざまな分野に触れ、様々な事業に関わる方々との出会いを通して「どの分野でも共通していることは何か」という質問に変わった。するとその回答は、来日当初多くの人に言われたが理解できなかった「がむしゃらに働いた」という回答にあるのではないかと今は思う。

あらゆる分野で行政職員や会社社員、一般市民が各自の「仕事」に集中して取り組んでいる光景は過去でも見られたであろうし、今現在も見ることができる。その延長線に都市部や農村部の差があるとしても、どこでも基礎インフラや社会インフラが整備され、町は整理され清潔に維持されているのではないかと私は感じる。

私は日本で生活して災害時以外停電も断水を経験したことがない。また、病気になれば出向いた病院で確実に診察を受けることができて、官民問わず支払いまたは返却手続きの手違いを全くと言えるほど経験していない。先進国に在住する者はこのことは当然であると思うであろうが、これはなかなか簡単に維持できることではない。

それを裏付ける極端な例が（毎回、研修員と一緒に驚く）大都市である東京の道端で財布を落としても財布の中身を含めて返してもらえることである。これはどの国でもありうる話ではない。

「国造り」を考えるうえで、もう一つ日本における「仕事」について気付いたことは「情報」や「データ」の量である。日本の歴史が長いとはいえ、どの分野でもどんな些細なことでも「人の生活」に関わる課題であれば膨大な記録が存在する。その情報を見るだけで、どのくらい地味な作業が繰り返されたのか想像するだけで圧倒される気持ちになる。

どんなデータや情報を見てもどうしても頭に浮ぶのは交差点等でたまに見かける交通量を記録する人の姿である。晴れの日でも雨の日でも車の排気ガスにさらされながら地道に車両もしくは人の交通量を記録する人の姿である。

どの分野でもある課題の対策や政策を施策するには必ず情報が必要である。ただし、その情報を得るには、地道な地味な作業が絶対つきものであり、なかなか情報収集が困難である。

現代社会だとカメラやセンサー等科学技術を活用して収集すればいいと思いがちであるが、デジタル時代以前の日本は既にその情報等を収集し、記録してきた。そしてどの分野でも各情報を常に更新しながら活用し、生活環境を改善してきた。

秘密を解く糸口は「便利さ」実現への努力

その一方、日本のどの町を歩いても感じることはインフラ整備だけでなく「便利さ」への「こだわり」である。電気や水道だけではなく、交通の便、買い物の便利さ、教育へのアクセス等、「人」の当たり前の要求であるがなかなか構築もしくは維持、発展が難しい様々な「便利さ」に対してそれを実現する努力が常にされていると私は感じる。

しかし、この「便利さ」は「楽をする」という意味ではない。場合によってこの「便利さ」を入手するまでとてつもない努力とエネルギーが必要であると日本に住んでいて多々感じる。

伝統（慣習）を守りながら日常に近代技術の「便利さ」を取り入れる努力こそ、自分が以前、知りたかった「伝統文化と最先端技術の調和」の「秘密」の糸口ではないかと私は思う。

日本の歴史を調べれば経済発展の犠牲や闘争が数多くみられると反論されるが、日本社会は、そのたび時間をかけて過去の歴史や記録を調べながら情勢の調整を行い、知識と経験を活かして歩んできたのではないかと私は思う。

今の自分は、かつての自分の疑問であった「日本の秘密」から遠ざかっている気もするが、日本で生活して、どうしても日本の「国造り」には政策等だけではなく日常的な国民の行いが最も重要であったと、近年思う。

キムラ・カルロス・アルベルト・ヒロシ／フリーランス。JICEコーディネーター（ポルトガル語）。ブラジル出身。ブラジリア大学国際関係学部卒業。日本大学大学院国際関係研究科修士課程修了。1996年よりJICE研修監理員として登録され、数多くの研修・通訳案件を担当。

南足柄で好い日本を見つけました

文＝黒柳 俊之（Toshiyuki Kuroyanagi）

「積小為大」を実践する南足柄の農業1年生に

2015年9月末に長年勤めたJICAを辞めて、翌年2月に株式会社国際農業開発を立ち上げ、そして、４月末に南足柄市に移り住み、農業を始めました。南足柄に農産物を生産・販売している会社があって、そこで農作業の手伝いをする代わりにトラクターなど大型農機具を無償で借りての農業事始めでした。

南足柄や山北町を含む西湘地域は、「足柄茶」の産地として有名な地域です。ある日、その会社の手伝いで茶摘みに行ったのですが、軽トラしか通ることができない農道を走ること15分くらい、茶畑は山の奥深い南斜面にありました。そして、茶畑は、見事な段々畑でした。この畑に、いつお茶が植えられたのか分からないが、おそらく戦前に開墾されただろうとのことでした。昔は道路もなく重機もなかったので、鍬やシャベル、つるはしで手作業により道を造り、山を削って、石を積んでコツコツと畑にしたものです。こういう畑は、南足柄、隣町の小田原市、山北町など西湘地域には普通に見られる光景です。ミカンや梅も山の南斜面を開墾し植えられています。今でこそ、軽トラで畑まで直接行けますが、以前は農道すらありませんでした。そして収穫作業も急斜面での作業なので危険ですし、重労働です。昔の人は偉かったと日本人の勤勉さの原点を見たような思いでした。

南足柄は、偉大な篤農家、二宮尊徳の生家がある小田原市栢山に隣接するところですが、二宮尊徳は「積小為大（せきしょういだい）」という教えを残しています。二宮尊徳は「大きなことをしたいと思えば、小さな事を怠らず勤めるがよい。……1万町歩の田を耕すのも、ひと鍬ずつの手わざである。…山を作るにも、一もっこの土を重ねてゆくのだ。……。精を出して小さなことを勤めてゆけば大きなことは必ずできあがる」という教えを残しています。お茶畑は、まさに、二宮尊徳の教え「積小為大」そのものです。小田原には報徳二宮神社があって、二宮尊徳が神様として祀られています。

ODA業界人の援農に励まされ良き日本を耕す日々

西湘地域はミカンの産地でもあります。私の畑は広域農道沿いにありますが、周りはミカン園と梅園ばかりです。果樹園にはフェンスはありませんし、広域農道にも枝がはみ出ています。初夏には梅が、秋冬にはミカンがたくさんなっていて、畑に入らなくとも農道から「収穫」が可能です。広域農道は二車線の立派な道路で、足柄古道や紅葉の名所、足柄万葉公園、富士山がきれいに見えることで有名な足柄峠にもつながっているので、農道と言っても交通量も多いですし、ジョッギングや散歩をしている人もよく見かけます。私の毎日の通勤路でもあるのですが、はみ出して実っている梅やミカンをこっそりと「収穫」している人を見たことがありません。私の畑の農道沿いにパッションフルーツやパパイアを植えているのですが、未だかつて被害にあったことはありません。盗んでいるという意識は全くないでしょうが、対策をとってもとっても盗むのは、カラスにイノシシにハクビシンの動物たちだけです。南足柄で農業を始め、改めて日本人のモラルの高さと動物たちのたくましさに感心しています。

温泉、清らかな水、うまい酒、そして雄大な富士山の眺望に恵まれた南足柄。日本と日本人のよさを実感できる地で、黒柳氏は農業を始めた。

私の畑には、JICA時代の仲間やかつて一緒に仕事をしたODA業界の方が激励、援農に来てくれます。もちろんJICEの方たちもです。はじめての農業に挑戦している者にとってこの激励、援農は感激で、力が湧いてきます。東京から近いと言っても畑まで2時間はかかります。畑を訪問し応援してくれる皆さんの義理堅さや優しさ、日本人の良さを感じています。

最後に、おいしいお水の話です。富士山の伏流水だと思いますが、南足柄市や山北町には多くの湧水が出ています。私は稲も作っているのですが、この湧水を水源とした用水を使っています。田んぼには沢蟹が生息するほどきれいな水です。そして、山北町でこの美味しい水で作られている日本酒があります。おいしくてきれいな水で育ったコメや日本酒は、やはり「うまい」と唸り、毎日、おいしさの源を再発見している私です。

足柄峠から望む雄大な富士山は最高で、見とれてしまいます。南足柄市の隣には温泉の町、箱根があります。そして、おいしい日本酒もあります。日本人が大好きな、富士山、温泉、日本酒、そしてアサヒビール工場だってあります。素晴らしいところを見つけました。日本人はもちろんのこと、海外からも多くの方々にここ南足柄に来ていただいて、良き日本を知ってもらいたいものです。

陽光を浴びてたわわに実るミカン。失敬していくのはカラス、イノシシ、ハクビシンら動物たちだけだ。

黒柳 俊之／株式会社国際農業開発代表取締役社長。東京農業大学を卒業後、国際協力事業団（現・JICA）に入団。経済基盤開発部長兼公共政策部長、人事部長、理事を歴任。

日本中、いたるところで多彩な「お・も・て・な・し」

文＝梶原 晶子（Akiko Kajihara）

七味唐辛子かけまくりの研修員に食堂がとった驚きの行動とは？

JICA研修の最後やJICE交流事業のプログラムの最後には研修員や訪日団にアンケートを書いてもらいます。日本の印象、滞在中一番印象に残ったことなどが書かれていますが、その多くには「日本人は親切で勤勉である」、「日本のおもてなしの心に感動した」、「日本の街はきれいで、どこへ行っても安全である」というフレーズが入っています。

最近では「お・も・て・な・し」という言葉が有名になりましたが、日本人の親切なところ、おもてなしの心というのは昔からよく研修員から聞いていました。

私が担当した研修員の多くが道に迷った時、近くにいた日本人に道を聞いたらとても親切で、その場所まで案内してくれたと話してくれています。彼らは日本人の親切にいたく感激したようで、私が研修員を連れて訪問先へ行く際に少しでも迷った様子を見せると、さっさと近くにいる日本人に聞くようになりました。

また、タイからきた研修員がある会社の工場で研修を受けた時のことです。昼食の時間になり、まわりにはコンビニもレストランもないため工場の食堂で昼食を食べることになりました。2〜3人の女性が厨房で働いているその食堂では、メニューは焼き魚定食ひとつだけ。食べられるのかな？と心配したのですが、研修員のみなさんはおいしそうに食べ始めてくれました。しかし…。とても辛い料理に慣れていて味噌汁が甘すぎたのでしょうか。七味唐辛子をかける、かける…。結局、味噌汁は真っ赤になってしまいました。厨房の方たちが気を悪くするに違いないと思った私は、研修員を代表して謝りました。ところが皆さんはにっこり笑って「自分の一番好きな味で食べてもらうのが一番よ」と言ってくれたのです。

そして翌日、私たちが座ったテーブルには、なんと！七味唐辛子の新しい大瓶が置いてありました。もちろん研修員全員がお味噌汁だけではなくごはんにも、うれしそうに七味をかけていました。

自分のお料理に心を込めてお出しするのは「おもてなし」。さらに相手の嗜好や習慣の違いなどすべてを受け入れることも日本の「おもてなし」のひとつなのだと、その時、感じました。

アクシデントも感動に変えてしまうニッポンマジック

研修監理員としてのキャリアをスタートさせてずいぶん時間もたち、最近では研修事業よりも交流事業でエスコートやコーディネーターとして仕事をすることが増えてきました。

少子高齢化・過疎化が進んでいるといわれる地方へ行くこともあるのですが、積極的な高齢者の方々が多く、英語が話せるようには思えない方たちが、言葉に関係なく訪日団に話しかけてくれます。

何年か前のことですが、プログラム中に訪日団のひとりが転び、ひざをけがしてしまいました。出血は止まりましたが、傷口がかなり深かったので近くの病院へ行きました。

待合室は満員。待っている患者さんのほとんどが高齢の方でした。けがをした女性には待合室で座っていていただき、その間に手続きをして戻ってみると、彼女は高齢の女性の患者さんたちと片言の日本語で会話をしていました。好奇心旺盛な患者さんたちは「どこから来たの?」、「旅行?」、「どうしてけがしたの?」、「ここは○○が有名だけど食べた?」などなど。いろいろとお話ししてくれていたのです。そして病院を出るとき彼女の手には患者さんのひとりがおみやげにと言ってくださったミカンが一袋。

その日はすべてのプログラムへの欠席を余儀なくされたにもかかわらず、彼女は「日本の病院の見学もできたし、地元の人と交流もできた。みんなとてもフレンドリーだった」と、意気軒高でした。けがをして落ち込んでいる彼女を元気づけてくれた地元の皆さんには本当に感謝しています。

日本人の親切さのほかに訪日団がよく言うのは、日本が安全な国だということです。訪日団の中には貴重品にあまり注意を払わない人もいます。特に高校生や大学生はパスポートや携帯電話をなくしてしまいがちなのですが、私が担当したケースでは日本人の方が見つけて警察に届けてくれて、無事、本人の元に戻りました。訪日団の一人がタクシー内にお財布を忘れ、本人が気づく前にタクシーの運転手がまたホテルまで戻って届けてくれたこともありました。貴重品などを届けてもらった訪日団は「自分の国では考えられないことだ」とひたすら感激するのですが、日本が安全だとあまりにも信じすぎている人が多いので少し心配しています。「日本は比較的安全ではあるが、貴重品には気をつけてください。見つからないことも多いんですよ」と訪日団には初日に釘をさしてはいますが、来日して少したつと、みなさん警戒心を完全になくしてしまいます。そのためプログラム中は毎朝、挨拶と一緒に「パスポートを持ってますか？」と聞くことが習慣になってしまいました。

おもてなしの心と安全できれいな街以外にも日本の良いところはたくさんあります。これから日本に来る方々にはまた違った日本の良いところをぜひ見つけてもらいたいと思います。

梶原 晶子／フリーランス。JICEコーディネーター（英語）。1980年にJICEに臨時職員として雇用後、1984年より研修監理員としてJICEの業務を支えてきた。近年は国際交流事業、電気通信、道路・交通関係の研修監理業務で活躍。

0.000000825%の日本

文＝牧 公仁子（Kuniko Maki）

98カ国の人々と「WOW!」な体験を共有

私がJICEで仕事をさせていただくようになったのはかれこれ20数年前。当初はよもやこんなに長いお付き合いになるとは思いもしませんでした。「なぜ、こんなに長くこの国際交流の仕事を続けられたのですか」と、尋ねられることがあります。そんな時こちらから逆に尋ね返すのですが、「人間の心臓の中を見たことがありますか？ ヒトや動物の出産のシーンに立ち会ったことがありますか？ 次々と車が製造ラインからでき上がってくる様子を見たことがありますか？ 製鉄所の高炉の真っ赤に溶け出る鉄を見たことがありますか？」と。相手の方は目を点にされますが、このどれも「WOW！」としか表現のしようのない体験を、医者でも獣医師でもエンジニアでもない私が、さまざまな国々から招へいされた人達の研修や交流プログラムにアテンドすることで共有させてもらえるのです。知的好奇心を大いに満たしてくれる出合いが次々とあるのですから、退屈している暇はなく、気が付いたら20年という月日が過ぎていました。そんな国際協力の現場で働く機会を提供してくれるJICEとこれまで一緒に歩んでこられたことに感謝しています。

交流事業、技術協力、留学生事業など、さまざまな形態があるJICE事業ですが、これらの招へい事業の参加国もアフリカやアジアから欧米諸国まで多様です。ちなみに私がこれまで仕事で出会った人の国の数を今回改めてカウントしてみると98カ国。外務省が国として認める総数は196カ国とのことですので、その約半分の国々からの人に会う機会に恵まれたことになります。また、仕事で出会った外国人の数は仕事開始以来5年の時点で約150名。以降は数えるのを止めてしまいましたが、5年の数字をもとに20年に換算するとこれまでに一緒に仕事をした外国人は600人程度になります。世界の人口は73億。だとするとこの数はそのわずか0.000000825%でしかありません。限りなくゼロに近いようなたったの0.000000825%。されど0.000000825%。この人達との交流の中で、世界の中の日本、日本人について考える機会をもらっています。

さて、私が出会ったこの世界人口の0.000000825%の人たちによれば、日本とは、街にゴミひとつ見当たらず、道はキレイに舗装されて泥道の埃っぽさとは無縁の清潔さで、電気も水も止まることなく、インフラが素晴らしく整い、どこに行くにも公共交通機関で時間どおりに1分単位で正確に到着できる便利さで、空港や駅の公衆トイレにもウォシュレットが完備され、高速道路を走ればゲートが自動で開くような先端技術に囲まれた環境にもかかわらず、古くからの伝統や建物を大切に守り、自然も豊かな国…らしいのです。そしてそこに住む私達日本人といえば、大変勤勉でよく働き、細部にこだわる仕事の仕方をし、時間に正確で、規則を順守し、決めたことは必ず守る信頼できる人たちで、道を尋ねればその場所まで連れて行ってくれるほどに親切な人達…なのだそうです。

研修や交流事業の終了時、参加者に日本の印象を尋ねる質問を含んだアンケートを実施しますが、それをざっとまとめるとこうなります。少々表面的で似通ったコメントが多いアンケートですが、その中につい最近、いつもより少々深い観察を含むものがあったのでご紹介します。

「日本人は創られる」あるスリランカ人研究者の言葉

それはスリランカの魚の研究者からのものでしたが、日本での1カ月半の研修期間の中で、一番心に残り、一生の思い出となったのは学校訪問だったと記載してありました。学校訪問で体育館に全学年が集まって披露してくれた歌に彼が涙する様子を目にしたのを覚えていたので「子ども達の歌声が日本の一番の思い出だったのね」と聞いてみたところ、こう答えが返ってきました。もちろん子ども達が披露してくれた歌声は素晴らしく、何より自分の子どもと同じような年端もいかない子ども達が、自分達外国人を迎えるために時間をかけて練習してくれたもてなしの気持ちを思うと心の琴線に触れ、涙が溢れてきたと。ただ、その他もう一つ日本について大きな発見があったことが、学校訪問が日本滞在で一番印象に残る経験になったのだと。そしてその大きな発見とは、日本の学校の給食と掃除の時間だったと言うのです。

給食当番の子ども達が皆エプロンをつけて給食室に給食を取りに行き、自分達で配膳、全員に給食が行き渡り、着席したのを確認すると「いただきます」の合掌をしてお行儀よく食べる。後片付けも子ども達が自分でミルクパックをリサイクル用にきれいに開いて整然と重ねて集めるまでをし、さらに給食時間の後には掃除の時間があって机を後ろに下げて教室の掃除を自分達でする……私達日本人にとってはごくごく当たり前の学校風景なのですが、

2016年KAKEHASHI Projectで来日した若手研究者第3陣が、環境にやさしく発電効力の高い火力発電施設の例としてJ-POWER磯子火力発電所を視察。右端が牧氏。

2014年KAKEHASHI Project若手クリエーター第3陣カトーバカレッジの学生と。日本をイメージした感動のオリジナル曲を披露した報告会を終えて。前列右端が牧氏。

彼は自分の子どもや自国との比較の中でその風景に心底驚かされ、そこに日本人の本質を見て「ああ、日本人はこうして日本人として創られていくのだと発見した」と言うのです。給食や掃除の風景を見て、規則を重んじ、集団行動が得意な日本人の特徴にリンクさせ、それが教育を通して子どものころから育まれていくのだと考えた彼の考察になるほどと思わされました。また最後に彼は「この生徒達が日本の将来なのだと思うと日本の将来は明るい」と締めくくってくれました。

せっかくのありがたいコメントに、喉元まで出かかった現在の日本の教育現場が抱える不登校、いじめ、学習能力低下等々の問題についてグッと飲み込み、伝えることができなかったことを付け加えます。

日本での体験は参加するプログラムによってさまざまでしょうが、これからJICE事業で来日される皆さんがたくさんの「WOW！」な体験や、心の琴線に触れるような出会いがあることを祈っています。そしてできればさらに一歩踏み込み、良いところも悪いところも含めた日本や日本人の本質について考察ができる体験があることを期待しています。

牧 公仁子／フリーランス。JICEコーディネーター（英語）。獨協大学外国語学部英語学科卒業。1993年よりJICE研修監理員として数多くのJICA技術研修や通訳派遣業務を担当する。2000～2002年にはJICAトルコ国プロジェクトへ業務調整員として派遣。近年は国際交流事業、出前講座などを中心に活躍。

「日本」を伝えるということ

文＝齊藤 牧（Maki Saito）

外部環境の変化に応じて拡大・深化した40年

「今回の研修内容は他の国でも学べたかも知れない。しかし『日本で学ぶ』ということ、これこそが最も重要な点であった」

JICEに入団して間もない頃、ある研修コースの閉講式でのスピーチで研修員代表がこのように語った。講義内容も研修総括の内容も、設定した到達目標をほぼ達成し得る内容であったが、「日本に来て」学ぶ意義は何だったのだろうとぼんやり考えていた私は、スピーチをした研修員に、あなたにとって『日本で学ぶ』とはどういうことだったのか質問した。彼は「『日本』を知ったことです」と即答し、微笑みながらこう付け加えた。「日本の皆さんと一緒にいられて本当によかった」。

JICEはこの40年、外部環境の変化に応じてその姿を変えてきた。設立当初は、その3年前に誕生した国際協力事業団（現・独立行政法人国際協力機構）が実施する事業への協力と、携わる人々の福利厚生を目的として、広報事業や互助会、保険事務などを業務の中心としていた。当時のJICE職員には国際協力の現場を支える縁の下の力持ちとして、正確できめ細やかな対応が求められており、JICEもその期待に応えてきた。その後、ODAを取り巻く状況の変化に伴い、外国政府や国際機関から直接研修を受託する機会が増加し、また新たに開始された留学生支援事業によって海外にプロジェクト事務所が設置されたことにより、職員が長期にわたり現地業務に携わるなどJICE職員が「現場に出る」機会が増加し、その業務所掌は拡大・深化した。私が入団したのは留学生事業が軌道に乗り始めた頃であったが、新参者であった私にもJICE職員として求められているものが大きく変わりつつあることが肌で感じ取れた。さらに2007年から外務省の国際交流事業が開始され、語学力をはじめ交渉力・折衝力などの能力に加え、従来以上に事業の根幹に関与し、JICE独自のプログラムの構築を求められるようになった。

これらの事業において、JICE職員は一貫して日本の経験や日本のハード・ソフト両面における技術優位性を研修生や留学生、招へい者に伝えてきた。私も、相手にとって必要な講義や訪問先を選定し、効果が高まるコンテンツ作成を進めてきたが、心のどこかに冒頭の「日本を知る」というキーワードが引っ掛かっていた。研修や交流プログラムにおいては、時間的な制約がない限り「日本」を理解してもらう講義や文化体験、視察を少なからず組み込んでいる。しかし、その日本の伝え方がこちらからの一方的なものにすぎないのではないかという違和感が常にあった。日本の伝統的な文化や風習、最先端の技術やサービスを紹介しても、彼らが理解する「日本」は断片的なものであり、そこから導き出される日本への印象は画一的であることが多い。あのとき「日本を知った」ことが何よりの収穫だったと話した研修員は何を知って、何を学んだのか。

海外の日本紹介イベントにて五感を用いた日本理解を解説する齊藤氏。

出張先で先方政府高官と面談する機会もあるため、常に事前の情報収集とJICE職員として相応しい対応が望まれる。フィリピン国貿易産業大臣（当時）との面談において。

世界に「日本」を伝える責任

あるプログラムの昼食時、招へい者たちがそれまで脱ぎっぱなしだった靴をしっかりと揃えていた。一人が「日本人がそうしているから」と言い訳のように話すと、もう一人が「面倒だけど、その方がお店の人がしまいやすいものね」と言ったのを聞いて私は少し驚いた。ほんの些細なことであるが、私は彼らに靴を揃えることも揃えた後のことも何一つ話しておらず、全ては彼らが自分たちでその行為を見て、その意味を考え、その一連の行動を「負担がある・だが効率的・親切」と解釈した結果だった。訪日者は、日本で見聞きした「日本らしさ」を、自分なりに解釈して相対的に理解しようとする。日本のものづくりの技術や発展の歴史は本やインターネットを通じて理解できるが、それを実践するとなると、結果を出すに至った歴史的背景や実践する人間のメンタリティを理解する必要がある。そうでなければ、自国の文化や技術レベルに即した形での応用が難しい。その「日本」を相対的に理解しようとした時、彼らは一番身近にいる私たち、JICEスタッフを通じて「日本人」を観察する。我々が日本の良さを真に理解し、意味を考え、行動しない限り、彼らは日本を包括的に理解し、自分なりの解釈を加えて消化することが難しい。その意味で我々が彼らの前に立ち、話し、行動することの責任は大きい。

さらに負うべき責任は、パートナーシップの構築である。日本は相手の国に感謝されるためだけに国際協力事業を行なっているのではない。我々がフロントラインに立ち、JICEのミッションの文字どおり、世界と日本をつなぎ、日本が信頼できる強固なパートナーであることを示していく必要がある。その調整役としてのJICEスタッフの存在は今後ますます重要であり、多方面にわたるネットワークを維持していく必要がある。

あの有名な、赤の女王の「その場に留まり続けるには力の限り走り続けなければならず、もしどこかに行き着きたければその倍の速さで走らなければならない」という言葉は、まさに今のJICEに必要な概念である。私自身も常に学び続け、「日本」を伝える責任感を持ち、アクティブなネットワークを持つJICE職員でありたいと思っている。

齊藤 牧／JICE総務部人事課長。民間企業勤務を経て、JICEに入団。研修監理部（現・研修事業部）で約10年間JICAなどの研修事業に携わる。その後、国際交流部、留学生事業部を経て2015年より現職。

コミュニケーションと日本理解を育む 実践的なJICE日本語講習

文＝渡部 裕子（Yuko Watabe）

技術研修員から定住外国人まで 幅広い受講者に対応

JICE本部のセミナールームで打ち合わせをしていると、ときおり講師の後に続いて日本語を復唱するにぎやかな声が聞こえてくる。JICEが受託している厚生労働省の「外国人就労・定着支援研修」の日本語授業の1コマだ。

JICEが実施する日本語講習は、技術研修員を対象に1978年にJICAから委託されて始まった。これは2013年にJICAの日本語研修が全てJICA内部で実施されるようになるまで、長くJICEの日本語研修の中心事業であった。この間、1983年にはJICAの受託事業の一環として「技術研修のための日本語（初級～上級）」のテキスト開発が行われ、研修の期間やコース内容など多様な研修員に対して、より質の高い研修を支える道具として日本語研修を提供できたものと思われる。

2000年には現在も受託している外務省の人材育成奨学計画（JDS）の立ち上げとともに現地及び本邦日本語講習が始まった。限られた期間と人員で現地環境を整える運営準備と、複数の国々への講師の派遣を行うのは並大抵なことではなかったと思われるが、それまでの長年の人的・専門的日本語教育体制の蓄積がそれを可能にしたというのは当時の担当者も語っていることである。日本語研修の特徴は、その日の授業の到達目標を日本人と実際にコミュニケーションできるところまでとし、日本人の考え方や文化への理解促進をも盛り込んでいたという非常に実践的なもので、その流れは今も続いているものである。

現在、JICEが実施している日本語講習は、対象者も内容もより幅広くなっている。

おもなものを挙げると、まず、先の「外国人就労・定着支援研修」の日本語講習は定住外国人を対象にした就労のための日本語講習である。就労や求職活動に必要な日本語を身につけるとともに、日本の労働環境や職場でのマナーやルールを理解することを目的としている。実施地域は16都道府県88地域に上り、年間250コース、受講者数4200人規模で実施している。

また、外務省の人材育成奨学計画（JDS）やアフリカの若者のための産業人材育成プログラム（ABEイニシアティブ）、一橋大学、職業訓練大学校など留学生や、ロータリー平和財団、アジア経済研究所など研究員に対する日本語講習があり、企業に対しては外国人社員向けにビジネス場面に関わる日本語講習を実施している。

さらに、近年では海外の大学等高等教育機関における日本語講習も実施している。経済産業省のアブダビ高度人材育成事業では、アブダビ地域にある大学など複数の高等教育機関に、JICEの日本語講師が赴任し、日本語コースを立ち上げている。また、2016年、アフリカ開発会議（TICADⅥ）が開催されたナイロビ郊外の大学でも日本語の集中コースを実施した。これまでは日本で実施する研修・研究を支えるために日常生活やキャンパスで必要な日本語を学ぶ講習が多かったが、実践的・実利的目的ではなく、日本や日本語そのものに関する興味が受講動機になっている。このような日本語講習の実施は、日本のポップカルチャーの世界的人気や科学技術の信頼の高さを背景に、今後も増える可能性があるだろう。

きめ細やかなカスタマイズ実現 長期的視野でキャリア開発支援も

これらさまざまな日本語教育を実践している現在のJICEの日本語講習の特徴は何だと言えるだろうか。それは、多様な学習者のニーズに応じてきめ細やかにカスタマイズできることだと考える。

JICEに日本語講習を依頼しようとする委託元の多くは、日本語教育を専門にしない組織である。対象者が実際に必要となる日本語は何かをヒアリングすることによって明らかにし、専門的な視点でニーズに沿った、画一的でないカリキュラムの提案をすることが、他機関との差別化になるのではないかと考える。例えば、ビジネス日本語と一言で言っても、必要な日本語はその対象者の日本語レベルの違いだけでなく、その業務によって異なり、社内メールの書き方も企業によって違う。限られた時間で実施される日本語講習のシラバスも、その優先度が違ってくるのである。

今後は日本語の言語習得という面だけでなく、その言語習得の先にあるものは何かを見据えた日本語講習の実践が必要と考える。

例えば、英語で学位を取る留学生に対する日本語講習は現在も多く実施しているが、日常生活を送る上で最低限必要な日本語を早く習得すべきなのはこれまでと変わらない。しかし、これだけでは残念ながら研究仲間であり、将来的なビジネスパートナーとなりうる日本人学生とのコミュニケーションは日本人学生の英語力の問題もあり難しい。日本人学生と人間関係構築ができるような日本語学習のサポートは、円滑な研究生活のためにも必要なことではないだろうか。

さらに、日本への留学は自分自身にとって将来的にどんな意味があり、自国と日本にどのように還元するのかというキャリア開発の視点から見た場合、日本語はどのような役割を果たすのか。これは留学生だけでなく、日本に定住する外国人への就労支援においても当然のことながら必要で、日本語教育は長期的に行われるキャリア開発支援の一環という位置づけで考えることができる。

今後JICEの日本語講習は、さらに広がりを見せて行くであろうと考えられるが、講師も含めたますますの充実を目指したい。

カタカナで名前を書く練習をする受講生と、指導する渡部氏（左から2人目）。

「Hajimemashite. ○○ to mōshimasu」。来日前、自己紹介の練習をする受講生。研修や就労のために来日する外国人に対する語学講習は、実りある日本滞在に欠かせない。

渡部 裕子／JICE研修事業部計画課日本語主任。約15年、日本語教育機関で専任教員として留学生への日本語予備教育に従事。2013年JICEに入団。

厚生労働省の『外国人就労・定着支援研修』、大学や企業向けの日本語講習などJICEが実施する日本語教育全般を支える。

地域と共に創る事業

文＝長山 和夫（Kazuo Nagayama）

受け入れ地域の声が語るメリット

「海外からの学習旅行の受け入れ経験がありませんでしたが、このプロジェクトをきっかけに、震災前には取組んだことのないプログラムの実施や地域の色々な主体と連携することができました」、「本村の宿泊施設が協力して一団体を受け入れる事例を作れました。100名を超える団体の体験プログラム、ノウハウの確立、人材育成ができ、震災学習旅行、防災学習旅行をいつでも受け入れる体制が確立されました。宗教も人種も言葉もばらばらな海外からの団体を受け入れたことで、宗教ごとに対応できる食事メニューも豊富にでき、今後、本村のどの宿泊施設でもムスリムの受け入れが可能になりました。海外の学習旅行向けコンテンツも確立できました」、「住民が外国の方との触れ合いに慣れてきて、緊張せず楽しくなったようです。村内のおばあちゃんが今度はどこの国のお兄ちゃんがきたの？と気軽に声をかけてきました」、「田舎町でも海外からの受け入れをやれるという、自信を持つことができた」、「海外からの学習旅行の受け入れの経験はなかったが、このプロジェクトをきっかけに、社員のスキルアップを図ることができた。海外の習慣及び考えを知る上で今後の町作りに参考すべき事項もあった」、「英語での館内避難放送や和食メニューの提供、宗教による食事提供方法など、企業として学習できた」、「日帰りではなく複数日の来町だったため、さまざまなプログラムを提供する機会となった。地域内でも別団体や協議会が連携したり、お互いの受け入れを見学するなど、横の繋がりを作る契機になった」、「風評被害によって地域のイメージ低下が続くなか、海外から多くの学生が訪れたことでイメージ回復に繋がった。国内の学校や旅行代理店などからは、海外から来ているのに国内の学生が行けないことはないとの声が聞こえ始めた。また、世界各国に当町の自然・文化・人情をPR発信できたことは、ものすごい広告宣伝である」、「過疎地域で知名度も低い状態であったが、今回の事業展開により県内外そして、国外にも当村をアピールすることができ、取材の問い合わせも多く、当村のPRができた」。

ご紹介したのは、2012年度にJICEが実施した、海外からの短期招へい交流事業を受け入れていただいた地域の皆さまの声です。私たちは、事業全体を高いレベルで成功させることを考える時、訪問者だけでなく、その招へいプログラムを受け入れる地域にとって、どのような成果を挙げられるのかを考え、受け入れ地域・機関にとってのメリットも生み出す事業を展開したいと思い、日々業務にあたっています。

研修においても、知識・経験・技術を伝達する人・組織が、伝達する内容を整理し、より高いレベルでプレゼンテーションすることは、研修を受ける側にとって大きな成果を生みます。同時に、伝達する人・組織側にとっても、自分たちの有する知識・経験・技術を再構築することにつながりますから、メリットと満足度を生み出します。また、研修をより高いレベルに発展させていくと、一方的な伝達ではなく、教え、教えられる関係が双方向の学習作用を生み出すことになり、知の共有という段階を作りだすことが可能です。その意味で、研修の成果を図る時、受け入れ先の満足度も大きな指標の一つとなると理解しています。

受け入れを前にミーティングを重ねる長山氏（写真中央）。研修生と受け入れ地域の双方にとって成果になることを心がけている。

交流事業についてはどうでしょう？ 交流事業では、よりいっそう双方向性が重要になってきます。なぜならば、交流事業は、交流する双方の参加者があって初めて成り立つもので、招へい者だけのことを考えていては成立しないからです。招へい事業を実施していますと、どうしても、招へいする相手側のことに意識が集中し、受け入れる側のことがおろそかになりがちです。しかしそれでは交流事業としては成功しません。受け入れ側のメリットを考え、積極的なコミットを引き出すことが重要なポイントとなります。

私たちが招へい事業をコーディネートする時は、訪問者側・受け入れ側双方を、事業の参加者と位置付け、双方にとっての成果を追求していきます。

事業成果を高めるJICE支所の地域連携

招へい事業を各地域に展開していく際、陥りがちなのは、受け入れ地域に、遠方から依頼をかけ、その実施を受け入れ先に全てお任せする手法です。一見、受け入れ先のイニシアティブを尊重した効率的な実施に見えます。しかし、この方法でいくと、依頼者サイドや訪問者側の都合を優先した発想に引っ張られる傾向が出てきてしまいます。

私は、JICE に入団して25年になりますが、その間、研修事業と交流事業を主に担当し、本部以外での勤務は14年半となりました。その間、北海道、東北、中部、関西で勤務しましたが、案件づくりで訪問した地域は、北海道から沖縄まで日本全国に及びます。全国各地でプログラムを実施していく中で痛感したのは、前述のとおり、双方向性を意識した事業成果を得るには、プログラムの受け入れ地域に実際に足を運び、受け入れ地域と訪問者側との双方の成果を考え、実現する工夫を行う必要性でした。

招へい型事業以外のJICE の事業、多文化共生事業や留学生支援事業は、日本に在住する外国人を対象とした事業ですから、なおさら実施地域との連携が欠かせません。

JICE は、これまで40年間、本部と全国展開する支所で、地域に足を運び、事業を創ってきました。これからも地域と共にあり、地域と世界をつなぎ、地域と共に事業を創っていきたいと考えています。

東日本大震災の被災地、宮城県気仙沼市では津波で陸に打ち上げられた船を前に防災学習が行われた。

東日本大震災の被災地、宮城県女川町を訪問したASEANからの研修生たち。

長山 和夫／JICE地域連携担当部長、関西支所長。JICEの東北支所、中部支所、北海道支所などでの勤務経験から、2015年に地域連携担当部長に就任。研修事業・国際交流事業において豊富な現場経験を持つ。JICEの事業を地方から支える。

JICE 日本を魅せる仕事

文＝内山 選良（Erito Uchiyama）

黒子から自ら選択確保する組織へ JICE変貌の40年

「私の記憶が正しければ、昭和59年秋にJICA研修監理員に採用され、平成元年に職員となり、今日に至りました…30有余年3日の如し…おしまい！」とはいかないのが、執筆というものです。今回、設立40周年記念誌の執筆を指名されるという悪夢のような名誉に応えるために、JICEと私自身を振り返らねばならなくなりました（本当はひっそりと死ぬ前にするつもりでしたけれど…）。

いざ自分自身の職業時間と、この組織の歩みについて回顧してみると、堰を切ったように思い出が頭の中を巡り、それに浸ってしまい、なかなか文章がまとまりません。部屋の整理を始めて、アルバムを開いてしまって捗らない、そんな状態で何日も過ごしました。

技術研修15年、国際交流15年、在外生活3年の33年、思えばこの組織とともに歳月を重ねてきたものだと今さらながらノスタルジーに浸っております。

JICE創立10周年誌をバタバタと作っていたのを記憶している自分、20周年誌にちょっとだけ登場した自分、今日の組織にあっては化石化した人間なのだとあらためて感じ入っております。

JICEという組織も随分と変わりました。ODA事業の一つの柱である技術研修を陰で支える黒子としてスタートし、今日では自由意志と競争の下で仕事を選択確保のできる組織、あわせて全責任を自ら負う組織になることが叶いました。JICEが変わったと書くのは実に簡単なのですが、その時代、時節に吹き荒れた、嵐のような時間に身を委ねてきた者としては、隔世の感を禁じ得ません。

現在、私は国際交流部で「対日理解促進交流プログラム」と「さくらサイエンスプラン」という政府主導の青少年の招へい・派遣事業の策定と実施業務に従事しています。全て企画競争を経て獲得した仕事です。

現在は1年間に、50を超える国、地域から約9500名の招へいと派遣を行っています。JENESYS（アジア）、KAKEHASHI Project（北米）、JUNTOS（中南米）、MIRAI（欧州）と地域ごとに名称は違うものの、対象国との相互交流を通して日本のファンを増やし、未来志向の連帯の基盤を作ることを共通目的に、世界中に日本を発信するという目的を適えるために苦しくも幸せな日々を送っています。20人から30人を行動単位に、7泊8日という事業期間でいかに日本を伝えていくのか、そもそも国際交流って何なのか、自問自答しながら日々プログラムの中身を考えています。

平成元年、入団してすぐに配属されたのが当時の国際交流部でした。職員は5、6名でした。「21世紀のための友情計画」という青年招へい事業のプログラム策定と現場業務に従事しました。1984年に当時の中曽根首相が発案し、ASEAN加盟5カ国を対象に始まった純粋な国際交流事業で、その後、JICA青年研修に移行し現在に至っています。中国、韓国、南西アジア、中南米、アフリカへも地域を拡大していきました。

国際交流事業の参加者に修了証を授与する。彼らの中に、日本での日々が生き続ける。

日本はまさにバブル経済を謳歌していた時期でもあり、潤沢な予算が許されていました。招へい期間は約1カ月。都内プログラム、地方プログラム、広島・京都視察プログラムという3構成でした。ワープロの時代で、ようやくファックスが設置されるようになった頃の話であり、PCもインターネットもなかったけれど、年間500～800名程の招へいに、品川や池袋の基幹ホテルの部屋を借りあげて従事していました。

今日のJICEの国際交流の礎はこの時代に育まれたものを凝縮して発展させてきたものだと確信しています。

当時招へいされた各国の若者は現在、日本企業に在籍したり、首相や閣僚になるなど、その国の根幹をなす重責を担っています。彼らの中に、JICEの提供した日本の日々が生き続けています。

日本の“当たり前”が享受できない そんな人々へのミッションとは？

思えばずっと人と対峙する仕事をしてきました。ずっと人を観てきました。命を預かる仕事ですので、健康管理、自然災害をはじめとするさまざまな危機管理体制も、個々の事象経験を積み重ねることによって組織の力としてきました。

技術研修生にしても国際交流の招へい者にしても、私たち日本人が日々の暮らしの中で当たり前で意識することのないことに感銘を受けているという事実を教えてくれています。

それは、「日本人はきちんとしていて個々の責任を果たす」、「日本は清潔」、「日本は安全」という大きな3つの要素です。昔も今も幸いなことに彼らの語る日本人、日本像というのは大差ありません。逆に述べるならば、未だに海外には日本で当たり前である幸せを謳歌できていない国が多いということです。それは私たちの存在する理由があり得る、ということです。

彼らが語ってくれるこれらのことを、まずは我々日本人が十分に認識し、未来永劫、誇りとして意識し、維持してゆくことの大切さ、それを国内に知らしめていくことも必要だと強く感じています。あわせて、招へい者が自国との比較の中で、日本から得る気付きをいかに多く導き出すか、私たちが常に意識すべきミッションであると信じます。

難しいことを伝える前に、ありのままの日本を見せる、魅せるという価値はまだまだこの国には存在していること、私はその具現化をライフワークとしていきたいと思います。

JICEは40歳、世界中の人たちに物事を伝えることの難しさや喜び、その尊さを噛みしめてきました。一貫して人と向き合ってきた40年の積み重ねがJICEの至宝になっていると固く信じています。

JICEという組織で、世界中の人々との出会いを与えられたこと、それを支え続けてくれているあらゆる人々に感謝して50周年あたりまで頑張ってみようかと、ちょっと思っている自分がいます…。

ブリーフィング中の内山氏。

内山 選良／JICE国際交流部担当部長。日本サッカー協会（JFA）国際委員。元研修監理員（コーディネーター）。30年以上にわたりJICEに貢献し、JICEの国際交流事業をその始まりから支えて来た。

JICE 40周年記念エッセイ
～これからの40年に向けて～

40周年記念の冊子を作るにあたり、どのような内容が良いだろうと皆で相談した時、JICEに対するお祝いのメッセージをいただくだけのものより、たくさんの来日をしてくれる若者たちへのメッセージとなるようなものが良いだろうということで、意見が一致した。

この冊子にご寄稿くださった方々は、各分野における一流の方々ということだけではなく、これまでに何らかの形で研修・留学・交流・多文化共生といったJICEの事業に関わっていただいた方々ばかりである。ご多忙のなか、原稿をお寄せいただいたおかげで40周年記念の冊子が完成できたことを心より感謝したい。

いただいた原稿をよく読んでみると、日本の良さについて触れられたものが多いが、日本の技術力といった目に見えるわかりやすいものではなく、目に見えない捉えにくいものの記述が多いことがわかる。古来より日本人は、欧米の人のように“自己の存在”に焦点をあてるよりも、自然や死者をも含む“他者との関係性”を重視してきたといわれてきた。おもてなしの精神等は、相手のことを、まず、第一に考える精神といえ、相手との関係に重きを置く精神が現れたものといえよう。

JICEはこれまでの40年にわたって、この“他者との関係性”に重きを置いて、事業を実施してきた団体である。来日する研修生、留学生、交流への参加者等に、日本のこうした特徴を背景とともに得心してもらい、さらに日本の良き理解者としてよりよい関係性を築いてもらえるよう、JICEはこれからの40年も努力していきたいと思う。

（総務部長　堤 敦史）

JICE 40周年記念エッセイ
JICE 40th Anniversary Essay Collections

― つながる心、響き合う未来 ―

発行日 ／ ２０１７年3月２５日
発　行 ／ 一般財団法人 日本国際協力センター（ＪＩＣＥ：ジャイス）
編　集 ／ 北室 かず子（ノンフィクション・ライター、編集者）